

2023 年報 街中ゆったりカフェ

■ 目次

1. はじめに・・・・・・・・・・・・・1
2. 活動記録概要・・・・・・・・・・・・・1
3. 活動記録詳細・・・・・・・・・・・・・2
4. 美術作品 bun 氏・・・・・・・・・・・・・8
5. 寄稿・・・・・・・・・・・・・9
 - 泊と境 by 富樫豊・・・11、障害者になってしまったら by すずき・・・12、
 - 上市町での積層文化財調査 by 古川知明・・・14
 - 南九州 神話の旅 by 富樫正弘・・・15
6. おわりに・・・・・・・・・・・・・28 end=28



風会場風景

1. はじめに

本会は13年11月に発足した「皆さんで楽しむおしゃべり会」です。はやいもので10周年をむかえ、もう数か月たちました。この間、月一回の頻度で種々の話題を持ち寄りで井戸端な談義で皆さんが楽しまれたと思っております。

しかしながら、発足当初から作っておりました毎年の記録を掲載の会報は、2018年度でとぎれてしまい、かつコロナ禍もあって中断状態のままでした。コロナ禍もひと段落したこと、メンバーも以前より増えたこともあり、ここに心機一転、恒例の会報を作りました。会報によってこの一年を振り返りたく思います。見ていただければ幸いです。なお、会の詳細は、HPを見てください。

<http://buna.html.xdomain.jp/cafe.html>

2. 活動実施概要

各月の例会は13:30-15:30、音杉コミュニティセンターにて実施。以下に記録を掲載します。

◆2023 年例会

- 12 12.11 火 9 人
建築の法律、映画紹介、俳句、各種情報提供、食べ物、安全、自由語り
- 11 11.22 水 8 人
フリースクール、宮道家と蜷川家、黒薙・宇奈月の引湯菅、古墳(富山と近畿の比較)、世相(富山、日本、世界)
- 10 10.25 水 7 人
夏目漱石「私の個人主義」について(続); takek、立山姥尊信仰、宇奈月開湯 100 周年、他

- 9 9.22 金 5 人
夏目漱石「私の個人主義」について; takek、立山姥尊(姥堂)信仰、文学
- 8 8.25 金 7 人
富山俳句会; fujin、地球温暖化、露天掘り
- 7 7.24 月 7 人
農業政策審議会基本法検証部会中間まとめ概要; yamag、自由討議
- 6 6.26 月 5 人
小6体験学習下田金山跡見学、花と山菜、祭り、鉱山、南九州歴史訪問、オーガニック祭、他
- 5 5.24 水
自然解説員について; sekiy、フリースクール
- 4 4.24 月 9 人
新アンブ; gos、鉱山物語; hayas、フリースクール; shiin、
- 3 3.22 月
ひきこもり問題; takek
- 2 2.21 火 9 人
食の安全保障; yamag
- 1 1.23 月
弥生時代その2; tog(湯)

◆オーディオ鑑賞会

- 8.28(月)
パガニーニ／ヴァイオリン協奏曲第1番、他
- 5.22(月)
オペラ「アイーダ」――ヴェルディ、他
- 2.19(日)



会場風景

3. 活動記録詳細 23 年度

【 12 】 23 年 12 月例会

日時：12 月 26 日(火)、13:00-15:30

場所：音杉コミテイセンタ 1 階(上市町)

参加者：kur(初参加)、gos、suzk、tak、to(waka)、to(yuwa)、hays、fujin、bunn 計 9 人

▲話題提供；話題もちより

- ・ to(waka)；建築の法律
- ・ suz：映画紹介
- ・ fujin；俳句
- ・ bun；各種情報提供
- ・ to(yuwa)；食べ物の安全
- ・ 皆さん；自由語り

(1) 建築の法律 by tog(wakasugi)；

12 月 8 日に衆議院議員第一会館にて、建築系のシンポジウム。これに参加。様子を説明。
建物の建設には、計画、構造、環境などについて事細かな規制が明記された建築基準法に遵守することが求められている。しかし、この法律では、建築の在り方についてはほとんど扱っていないので、新たな基本法の制定が必要として、超党派で事が進み始めようとしている。

(2) 映画紹介 by suz

1923 年の関東地震では朝鮮人ガイドに毒物を井戸の投げ込んだなどのデマにより、多くの朝鮮人とともに日本人も殺された。このことを扱った映画がつくられた。なぜ、そんなことが起こるのか、皆さんで議論した。

(3) 俳句 by fujin

富山俳句の会の活動が「富山俳句「句会ふみ」」や「富山俳句通信」の資料によって紹介された。

(4) 各種情報提供 by bun；

- ・ 宇奈月学友館や県立図書館の概要
- ・ 日なた歴史通信掲載記事として、越中瀬戸訳研究者「長島勝正」展、文山純子写真展、他
- ・ 富山県立図書館所蔵「大岩鳥観図」、滑川博物館所蔵「上市町鳥観図」
- ・ 立山博物館企画展資料「立山と帝釈天」

(5) 食べ物の安全について by tog(yuwano)

食の安全についてのレジメをもとに、身の回りの食品、外食、流通、企業側姿勢の問題など危険性を解説された。特に、食品添加物、賞味期限、農薬などの状況を説明された後に、我々はこうした問題をしっかり受け止めることが大事であると結んでおられた。なおここでは、特に印象に残った協調事項を一部列挙しておく。

- ・ 食に対し、「常に消費者の事を考えている」考えと「自分たちの利益を最優先する」考えとがあり、二極化。
- ・ 食品添加物には、「おいしさのためのもの」と「企業が設けるためのもの」とがある。
- ・ 自然界にあるものは、バランスが取れ安定であり、安

全である。(人工的なものはそうではない)

(6) 自由語り by 皆さん

法律、閉ざされた狭い社会での狂気、成長と安全、などについて自由に語り合った。

▲案内；会報発刊について

本カフェは 13 年 11 月に立ち上げて 23 年 11 月で 10 周年を迎えた。18 年までは年一回の会報(年報)を発刊。その後はとだえる。今回は 10 周年として記念誌を発刊予定。会場では皆さんへ見本配布。皆様には、エッセイ、や文芸作品、写真や絵画などをお寄せいただければ掲載いたしますので、ご協力お願いしますとのこと。1 月中には原稿提出をお願いします。

【 11 】 23 年 11 月例会

日時：11 月 22 日(水)、13:30-16:00

場所：音杉コミテイセンタ 2 階(上市町)

参加者：shii、suzk、to(waka)、to(yuwa)、hays、fujin、bunn、yamz 計 8 人

▲話題提供

(0) スケジュール；話題もちより

今回は、shii さんと yamz さんが久しぶりの参加。話題提供いただきました。

- ・ shii；フリースクール始まる
- ・ bun；宮道家と蜷川家
- ・ hays；黒薙・宇奈月の引湯菅
- ・ suzk；古墳(富山と近畿との比較)
- ・ yamz；世相談(富山から始まって日本や世界についても)

(1) フリースクール始まる by shii

ようやく上市のカミル 3 f にてフリースクール「TERAKOYA みいち」を始めました。補助金で屋内をリフォームしましたが、まだ常設職員がおりません。これからソフトや人の面で充実を図っていきます。

(2) 宮道家 by bun

宮道家やら蜷川家の話。メモ不十分のため記載割愛します。

(3) 黒薙・宇奈月の引湯菅 by hays

大正 12 年 11 月、黒薙から宇奈月まで中空木管によりお湯を引いてから、100 年が経過。宇奈月温泉温泉開湯 100 周年となった。話題は、木管をどこでどのように作り、黒部川沿いにどう設置したかの二点。

木管製作には上市町にあった森井製作所がなくなった。能登から運ばれた太い原木を中空にして管にしたという。会場にいる 80 歳代の方々は、上市駅のヤードには沢山の原木が積まれていた当時を思い出され、昔ばなしにも華が咲いていた。

(4) 古墳について by suzk

富山では、古墳時代前期には前方後方墳が多い。中期に入ると円墳が多い。一方、近畿では中期に前方後方墳が多い。なぜかとの問題提起があり、皆さんと話し合い、次のような意見があった。大和政権と出雲政権の対比でみると

どうか。富山は日本海交易で出雲とつながっていた。など。
(5) 世相談(富山から始まって日本や世界についても)

by yamz

・ 編者から；富山県では「ワンチーム富山」と称する連携推進本部会議において、中川上市町長がこれまで二回欠席。町長側が「県による発言封じ」を問題に、知事側は「そのようなことはない」と返答。これが県内では大きな問題となっている。これを含めて富山の問題、日本の問題について世相談をお願いしますとして、yamz さんの談が以下のように始まった。

・ 知事と町長の間の事象(県側からに意向打診)はよくあることで、びっくりすることではない。両者が向き合って話をすれば解決するはず。マスコミは騒ぎ過ぎ。

・ 最近気になるのは、一極集中。地方分権(地方自治)を確立しない限り、地方が何をしても衰退は免れず。過疎という言葉の発祥地島根では松江と出雲を除けば本当にひどい状態。

なお、各メンバーからも、一極集中の危険性が指摘された。

・ エネルギー問題については、太陽光発電はいうにおよばず、アルミを媒体とした水素発電、小規模風力発電の開発が進められている。

・ 中国資本の進出には警戒必要。南の方では島木と買い取るとか、北海道を始め水源地をおさえるとか、勢いは止まらない。日本では、各種経済政策はいうにおよばず、民度向上を図ることも必要。

【 10 】 23 年 10 月例会

日時；10 月 25 日(水)、13:30-15:30

場所：音杉コミテイセンタ 2 階(上市町)

参加者；suzu、takek to(waka)、to(yuwa)、hay、fujin、bunn

計 7 人

題；夏目漱石「私の個人主義」について、後編 by take

▲ メインテーマ by takek

題:夏目漱石「私の個人主義」について、その2

9 月例会に続いて(9.22 金)の 1914(大正 3 年)学習院輔仁会における講演の文章を朗読された。漱石は個人主義を明確にし、これに対する国家主義を鋭く批判していた。

会場からは；

- ・ 漱石の好きな方々は彼の自由思考といえる。
- ・ 鷗外とは異なっている。
- ・ 大正時代では、若者が自由を謳歌していた。そして昭和に入り、戦争の時代となった。
- ・ 今の時代では、若者はモノを言わない時代となり、(SNS は単なる間に合わせもの)、将来を迎えようとしている。どんな時代になるのか。

・ 他

▲ ショートテーマ；各人からの話題

(1) 宇奈月温泉開湯 100 周年 by bunn

・ 当時の引湯菅は、アカマツの中心をくりぬいた菅を使用。黒蘆の源泉から宇奈月までの 7.5km に敷設。黒蘆では湯

温 90 度 C が宇奈月では 30 度 c に低下。引湯菅は川沿いに敷設。もちろん流されないように。ただし、十二野観音用水は山の中腹に黒部川に沿って敷設。

・ 上市町の森井さんが引湯菅製作に携わった。

・ 森尻は眼目山立山寺の参道の始点であった。

(2) 上市昔話に頭が牛で体が人間の話が掲載 by bun

森尻の和尚が立山信仰の信者の案内料を猫糞したので、

神様が怒って和尚の頭を

牛に変えてしまった、これが上市の昔話に出ている。また曼荼羅にも描かれているという。

(3) 富山俳句の会 by fujin

8 月例会に続いて、俳句について語られた。

(4) 障がい者問題 by suzu

・ 障がい者になると今までできた K とができなくなり、もどかしい。

・ まとまって話が聞きたいの声在り。他

(5) ゆったりカフェは楽しい by 全員

・ この場(カフェ)は、いろんな話題について自分の考えを自由に話せて楽しい。

・ ゆったりカフェはじっくりと話をする場とチャンスの提供を目的にしています。

・ 日常、人とは本当にしゃべる機会が少ない。

・ 他

▲ みみより情報；上市駅ビルにて

11/3(金)；11h～ 美術館の楽しみ方 by 美術館館長

14h～ 戦前期の富山を見る

by 滑川博物館長、近藤氏

11/4(土)；11h～ ジェオパーク、知って楽しむ in 上市

by 志村氏(チャリスト)

14h～ 上市、隠れた魅力、地鉄電車

by 奥水氏(ジェパーク)

深川氏(上市教育委)

【 9 】 23 年9月例会

日時；9 月 22 日(金)、13:30-15:30、

場所；音杉コミテイセンタ 1f、

参加者；gos、takek to(wakasugi)、hay、bunn 5 人

<A>. ショートテーマ；各人からの話題

(1) 立山姥尊(姥堂)信仰 by bunn、to

立山博物館学芸員の方の

講演会(大山歴史民俗研秋季講演会)有。

・ 出席者二人による概要説明。

立山信仰の偉い坊さんの母親が姥となって、女性救済の信仰が始まったとされている。姥尊信仰は長野大町ほか全国に有。

・ 印象に残ったのは、富山の場合は姥は恐ろしげなる形相だが、他は温和で優しい形相などとのこと。

(2) 文学について by haya

漱石講演に先立ち、文学について語る。Fuji 氏がいれば、と。

. メインテーマ by takek

題;夏目漱石「私の個人主義」について

1914(大正 3 年)学習院輔仁会における講演の文章を朗読され、所々に個人主義の様相について解説があった。我らは、当時の世相や漱石自身の人生観について堪能し、内容的には難しい面もあればユーモアたっぷりのところもあり、そんな文学を tak 氏の熱弁で満喫した。次回は今回の続きとのこと。

【 8 】 23 年8月例会

日時 ; 8 月 25 日(金)、13:30-15:30、

場所 ; 音杉コミュニティセンタ 1f、

参加者 ; gos, takek to(wakasugi)、to(yuwano)、hay、, fujin、yama、 7 人

主話題 ; 富山俳句会 by fujin

Fujin さんの俳句を堪能。情景を思い浮かべながら。いつか手ほどきを、とリクエストあり。

短話題 ; 介護問題 by yamag

介護の分野で今何が問題か、意見を出し合う。

もち周り話題 ; by 全員

地球温暖化 ; 今年の夏の高温について

露天掘り ; 尾張瀬戸市の陶土露天掘り。瀬戸川が乳白色。他

【 7 】 23 年7月例会

日時 : 7 月 24 日(月)、13:30~15:40

場所 ; 音杉コミュニティセンター

参加者 ; gos, shii、to 杉、to 湯、hay、fujin、bun(早退)、計 7 人

話題 ; 参加者全員で話題持ち寄り

- ・参加者全員の自己紹介、50 分
- ・農業政策審議会基本法検証部会中間まとめ概要

by yamag、30 分

- ・自由討議、話題は各自から、by 全員、50 分
- ・他

▲話題詳細

(1) 参加者全員の自己紹介

今回、hay さんの友人 fujin さんが参加さんかされたので、全員改めて自己紹介することになった。

- ・to 杉 ; ゆったりカフェの世話人。カフェの沿革説明。会の目的は「参加者が互いに想いを話し聞き合うこと」
- ・to 湯 ; 古代史が好きで調べている。山も好き。
- ・shii ; 議員。フリースクールに関心
- ・Gos ; 下田金山跡を守る。オデッセイマニア、音楽好き、他
- ・fujin ; 俳句をたしなみ、かつて学校の教員、農業に従事
- ・hay ; 昔は鉱山技術者。討論好き。
- ・bun ; 歴史が好き。話好き。(早退)

(2) 農業政策審議会基本法検証部会中間とりまとめ概要、 現行基本法制定後の約 20 年間における情勢の変化

by yamag

食糧需要の増加と食糧生産・供給の不安定化

食糧・農業をめぐる国際益議論の進展

国際的な経済力の変かと我が国の経済的地位の低下

我が国の人口減少・高齢化に伴う国債市場の縮小

農業者の現す用と生産性向上の技術革新

農業人口減少、集落縮小による農業を支える力の衰退

(3) 自由談義

- ・農業について、水田や菜園、ほか
- ・古代史について、神社の木材年代測定のデータが蓄積
- ・食品の安全性は国のどこがどうチェックしているのか。
- ・建築の扱う範囲が拡大。
- ・俳句について。11 月の例会で話題提供。
- ・ほか

【 6 】 23 年6月例会

日時 : 6 月 26 日(月)、13:30~16:00

場所 ; 音杉コミュニティセンター、1f ホール

参加者 ; gos、to 杉、to 湯、hay、bun 計 5 人

話題 ; 参加者全員で話題持ち寄り

- ・町小学生体験学習(下田金山跡見学) by Gos
- ・鉱山 by hayas ・南九州歴史訪問の旅 by to 湯
- ・オガニック祭り by to 杉 ・各博物館資料 by bun

▲参加者からの要望

- ・全員が発言できるようにして欲しい旨の要望あり。(カフェでは設立当初から数年間、その路線を踏襲)
- ・今回は要望どおりに、全員参加で話が盛り上がった。

▲話題毎に以下に記す。

(1) 町小学 6 年生体験学習(下田金山跡見学) by Gos

- ・小学生地域体験学習は 30 数年も続いている。

今年はコトがひと段落として再開。136 人参加。

- ・子どもは光るもの(鉱物)には高い関心あり。
- ・黒い水晶(黒は汚れ)、黄銅鉱、緑色の銅、金
- ・坑道の中に入れるのは下田金山行動のみ。

・堀れるところは

(2) 花、山菜 by Gos さんを囲み全員で

- ・シャクヤク : 薬草園 ショウブ ; 行田公園
- ・山菜は毒素を有する植物

(3) 祭り by Gos さんを囲み全員で

- ・上市町では 5 地域の神社にて祭りあり。

伊折、種、北島、広野、稗田

今では、広野と稗田能見まつりを実施。

明治期に始まった稗田まつりでは

獅子舞が 2 チーム結成。

- ・山菜は毒素を有する植物

(4) 鉱山 by hayas

- ・ダイヤモンド鉱物は超高压下で生成。

(人工ダイヤモンドは超高压装置で生成)

(5) 南九州一周歴史訪問の旅 by to 湯

- ・多賀神社 ; 伊賀と伊賀
- ・宇佐神宮 ; 豊の国

・他

(6)オガニック祭り(6/17) by to 杉

・有機農業の方々による有機農産物の販売イベントが
眼目山立山寺にて実施

立山町、滑川市、富山市からも参加。

一番人気はミスター玄米。

・立山寺の P は満杯。

少し離れた薬草園の P から十数分徒歩で会場に。

・好天に恵まれ大盛況。数百人程の参加のよう。

(7)各博物館の行事紹介 by bun

・行事紹介があった。

【 5 】 23 年5月例会

日時 ; 5 月 24 日水曜 13h30~16h00

場所 ; 音杉コミュニティセンター2階和室

テーマ ; sek 氏 ; ナチュラリストの話

Shii 氏 ; フリースクールの話

Sins 氏 ; 若者の話 →次回持越し

特別企画、オーディオ鑑賞会のご案内 (第 4 回目)

コーヒーを飲みながら音楽を聴きましょう。

・日時は 4 月 22 日(月)、13 時半から 15 時半まで、

・場所はクロボッケです。

・メイン音楽

新国立劇場オペラ「アイダ」新国立劇場オペラ

「アイダ」ダイジェスト映像 2013 凱旋行進曲

【 4 】 23 年4月例会

日時 : 4 月 24 日(月)、13:30~16:00

場所 ; 音杉コミュニティセンター、1f ホール

参加者 ; gos、sat、shii、sek、tak、to(杉)、hay、bun、

yamag 計 9 人

話題 ; ・新アンプのおひろめ by Gos

・鉱山物語 by hay

・フリースクール by shii

・近況 by sat

▲話題毎に以下に記す。ただし、文言やニヤンスは正確では
ありませんことご容赦ください。

(1)新アンプのおひろめ by Gos

ベリウム材を使ったアンプを新たに入手したので、お披露
目として、SEK さんのリクエストである凱旋行進曲をお
聞かせいたします、とのことで、楽曲を鑑賞いたしました。

GSD さんと SEK さんから、解説も以下のようにあり。

世界で最も人気の高いオペラの一つと言われる「アイ
ダ」が 4 月 5 日から 4 月 21 日まで渋谷の新国立劇場オペ
ラパレスで日本では 5 年ぶりに上演されました。有名な第
2 幕の「凱旋行進曲」はとても荘厳な曲です。ヴェルディ
がスエズ運河開通祝賀事業で上演する為に依頼されて作
曲したものです。

内容はファラオ時代のエジプトでエチオピアとの戦闘
の最中エジプト軍指揮官ラダメスとエチオピア王の娘ア

イーダとの悲恋物語です。とのこと。

(2)鉱山物語 by hay

ゆったりカフェでは下田や亀谷の鉱山の話が度々登場

し、その都度長きにわたり鉱業を専門とされていた hay さ
んの解説をいただいております。yam さんから、一度ま
とまった話をお聞きしたいとのことで、hay さん鉱山物語
として話題提供があった。なぜ鉱山系に進学し、実務に携
わったのかと言った視点で、鉱山人生をとくとくと語られ
ました。

大学に進学したが、あまり勉強をしてなかったので鉱山
系に進む。炭鉱は危険だから金属鉱山にした。本来は農学
でもよかったが。外国では露天掘り。日本では露天掘りの
できる場所はなし。神岡鉱山にも触れる。などの話があり
ました。

(3)フリースクール by shii

子供の育成問題に関心が高く、昔は少年スポーツの振興
な世話をしておられたとか。今はすべての子供が幸せにと
いったことで子供に関する格差是正を目指して子ども食
堂に取り組み、サイキンハフリースクールの設置にご尽
力されておられます。今回は上市における現状(実態)の報
告と取り組みの苦労話をされました。さしあたり、フリース
クールの場所をカミル 3 階確保する方向で動いていますとのこ
とです。会場からは、shii さんの活動を皆さんに知っても
らうことが大事といった激励が多数あり、shii さんは頑張り
ますので応援よろしくとのことでした。

(4)近況 by sat

フリースクールについての感想。

立山町では(街をどうしていくかについて)若手が集ま
り話し合っている。

【 3 】 23 年3月例会

日時 : 3 月 22 日(月)、13:30~16:00

場所 ; 音杉コミュニティセンター、1f ホール

題 ; 引きこもり問題 by take

【 2 】 23 年2月例会

日時 : 2 月 21 日(火)、13:30~16:00

場所 ; 音杉コミュニティセンター2f

参加者 ; gos、sek、tak、to(湯)、to(若)、hay、bun、yam

8 人、

概要 ;

今回、問題が生活と直結しているだけに 論議が大変盛
り上がりました。当時を思い出しながらメモ的記録を書
きます。記述に際しニヤンス相違や不正確さは多分にあり。
了解願います。

話題 ; yam ; 食の安全保障

資料 ; 鈴木宣弘著「世界で最初に植えるのは日本
〜食の安全保障をどう守るか」より抜粋

▲自己紹介 ; 新たに to さんが参加。この機会に全員の自
己紹介あり。各人のこれまでの活動歴を中心に。参加者の

年齢層は 60 代から 80 代まで。

▲論の解説

題目;食の安全; by yang 氏 資料に基づいて

a. 国際的取り組み;

・WFP と FAO が 2022 に世界同時多発食糧危機を早期警告

b. 日本の食料事情

・自給率

・2035 にはコメ 11%、野菜で 4%と予測

・鶏卵自給率は 2020 に 97%、今後、輸入 卵や 卵がス
トップなら 10%に。

・肥料(窒素、リン、カリ)も輸入。輸入率はリン・カリと
も 100%、尿素 96%

c. 世界食糧戦略; 食料は武器より安い武器。種を制する者
は世界を制す。

d. 農業支援

・アメリカ; 天候→農家所得減には 3.3 兆円直接給付
→困窮世帯には 3300 億円で買い上げの在庫余剰分を
配布。

・欧米; 政府が農家から設定の最低価格で農作物・製品
の買い上げ

→・国内外辺保人道支援 システム構築

→・農家の生産費を保障

・日本政府、やるべきは農業国産振興

d. 有事への備え

・欧米; 平時から農業を保護。

e. 他

▲討議;

a. 農業基盤整備

・市場原理の農業でいいのか。コメについて各県で競わ
せている。

・政治と消費の乖離

b. 食生活

・動物性タンパクについて、いままでで通りの消費は問題
だ。

・動物性タンパク主の食でいいのか。穀物中心では。

・食品廃棄も問題。これについて国民の考えが弱い。

・食についての問題、政治と消費の乖離ととらえる。

c. 富山の農業

・富山は水稻が主。畑作ができないものか。

・冬場は積雪のため何も作付できない。

・畑の作物は水をあまり必要とせず。富山は水が豊富。
このため水稻中心。

・土壌改良で土の保水を低下させる

→土壌改良。適地適作へ。

・. 余剰米問題

・戦後、水田開墾でコメ増産。その後はコメ余り。富山
では 4 割減反。

その一方で日米貿易摩擦により 1995(h7)以降コメ輸入。
米国から 40 万 ト。

d. 政治問題

・安倍政権、小規模農家不要制作。農業より工業優先が一
層加速

・農家平均年収は 100 万円程→むくわれない

→後継者不在・耕作放棄

→農業は危機に瀕す

e. 農業そのものについて

・土地について

・先祖伝来の地として地縁(人と地の結びつき、人と人の
結びつき) あり。

街づくりではコモン・モズで考えを変えていく方向あ
り。農にもあれば。

・冬場

・昔は冬部でもムシロ等づくりに励む。高度成長期には
出稼ぎ。今も。

・文化創作活動はどうか。ボランティア活動は。

f. 他

▲追加意見; 後によせられた意見;

a. 政策

・さて農業問題は長らく放置して来た政治の責任だと思
います。経済のグローバル

化の中で農業問題&食糧問題を混ぜこぜにした政策はま
ずいと思っています

b. 農業に従事する若者について

・初期投資

・有機農業や自然農の場合、数万円程。

・慣行農業(畑作含め)の場合、数百万円。

国からの補助金なしでは農業継続困難。ハードル高し。

・支援

・農を希望する若者への補助金支給

・ベーシックインカム導入。最近、居住を人権として位置付け
ベーシックワジング 構想もあり。

ベーシックインカムでは創作活動といったこともいいが、農支援
もありでは。

ベーシックアクション構想というべきか。

c. 農の戦中からの現代までの歴史的展望

・今日は、じっくりと意見を述べあえて大変面白かった。
若返った。

・日本は資源輸入国。貿易自由時代に海外からの農作物輸
入になれっこになっているので、いざとなったら(輸入で
きなくなったら)国民が危機状態に陥る。

・戦争中では(当時は子供であったので危機を感じなかつ
たが)、ものがなくなっていたことは覚えている。

1944(s19)の 11 月 10 日だったか 29 日だったか、学校
で女性教師が「東京が初めて

空襲にあったので直ぐに帰宅を」とのことで自分はすぐに
帰宅した。それからあつという間に日本がダメになり、3
月 10 日には東京大空襲となり、田舎でも食べ物がなくな
っていた。8 月 1 日に富山空襲。8 月 15 日に終戦。

・今の人達に言いたいのは今一度そうした問題について

考えるべし。

・アメリカでは博物館について、石油なくなったらどうするとか、先住民がどう暮らしたか、など教える場と捉えている。いざという時に役に立つということのようだ。日本でも弥生時代にどうやって暮らしていたのかなど学ぶことが必要と思う。

【 1 】 23 年1月例会

日時：1月 23 日(月)、13:30～16:00

場所；音杉コミュニティセンター、1f ホール

参加者；10 人

テーマ；話題持ち寄り

弥生時代その 2、鉾山の話もあり

(1) To(湯上野)氏；弥生時代について

邪馬台国はどこにあるのか、卑弥呼時代後に王となった

トヨの存在。手の受けとのかかわりなどについて。

(2) 関連して

・古代史の面白さは分からないことが多いだけに、種々推理できるところが面白い、とかで歴史談義に華が咲く。

・雄山神社の会報「いわさか」の紹介

・マンテンバイク活動近況

・議員活動近況；ゆったりカフェにも言及

・ほか

【 鑑賞会3 】 23 年8月「オーディオ鑑賞会」

日時：8 月 28 日(月) 13:30～；

場所 クロダ電器カフェ・クロポック

鑑賞曲；パガニーニ／ヴァイオリン協奏曲 第 1 番

指揮ケリーリン・ウィルソン NHK 交響楽団・他

【 鑑賞会2 】 23 年5月「オーディオ鑑賞会」

日時；5月 22 日(月)、13 時半～15 時半

場所；クロダ電器カフェ・クロポック

② 新国立劇場オペラ「アイダ」 2:47 新国立劇場オペラ「アイ

ダ」 2023 は 4/1～4/21 でした。ダイジェスト映像 2013 凱

旋行進曲は最もポピュラーな行進曲です

壮大なオペラを感じますね

【 鑑賞会1 】 23 年2月「オーディオ鑑賞会」

日時；2月 19 日(日)、14 時～16 時

場所；クロダ電器カフェ・クロポック

記事； 地元の音楽鑑談会でひと時を楽しむ(2/19)

地元のコミュニティカフェ「クロポック」にて、オーディオ論議から音楽鑑談まで楽しみたいとの声掛けに 10 数人が集まり、gos さんのサウンド入りの奥深い語りを満喫いたしました。もちろん、マダム「クロちゃん」のコーヒーがさりげなく興を醸し出していました。とにかく今回も大変な盛り上がりでしたので、当然のことながら次回(第三回目になります)もということになり、名残を惜しみながら散会いたしました。なお、写真はマダムからいただきました。



4. 美術作品

4.1 文山純子氏作品 三禅定の霊山そろい踏み

立山町歴史交流ステーション「日なた」にて展示

(見事な写真です)



立山

紅葉の立山



白山

冠雪した白山



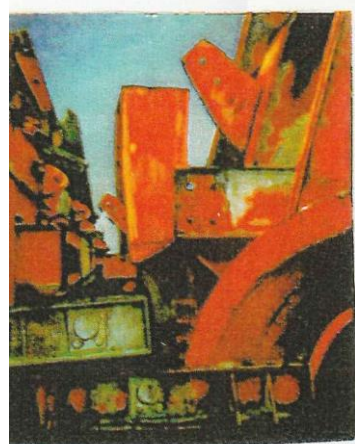
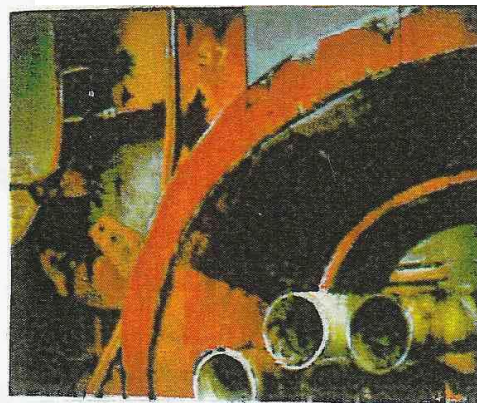
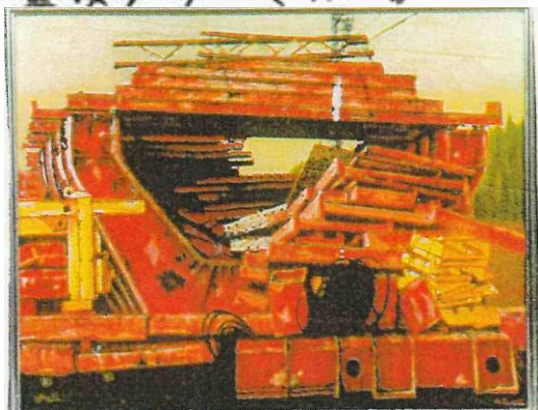
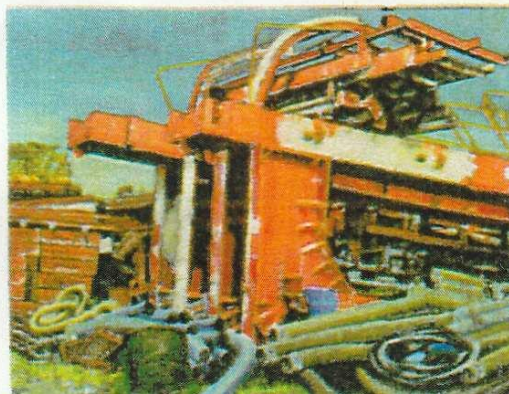
富士山

夕焼けの富士山

4.2 黒崎氏作品 絵画



建設資材 (東横市内)



(E 80~)



トンネル工事用機材置き場 (滑川市)



茶店にて.



鏡空堂.(東福)



寺内(東福)



千手滝.(聖泉寺)



笠取りの滝.



いばし川



いばし川



黒川果樹園.



中平植物公園.



若狭公園.



富士山(早稲)



早稲川



早稲川



早稲川



富士山(早稲)

2013年～2023年)

5. 寄稿

5.1 北陸街道の泊宿と境宿、概説

富樫豊

1. はじめに

越中路東端域の泊と境は、富山にとっては関西文化圏の北端辺境域ゆえに、特徴的な宿場となっている。ここに、生活文化から論じたい。

2. 泊宿

泊の街の生業は漁業と農業である。地形、近代民主主義、現代街づくりの3点から論述する。

(1) 泊宿、地形と街道

泊宿は県東部の端域にあり、地形的には黒部扇状地の東端である。この東端には朝日岳からの源流が黒部扇状地に入り、黒部川分流を奪い取って本川となった。これが小川と称されている朝日町(泊)の川である。

北陸街道については、黒部から泊へのルートは下街道と上街道に二分され、下街道は黒部三日市から入膳、泊を経たルートであり、上街道は黒部三日市から浦山や愛本勿橋を経て舟見から北上して泊に至るルートである。

(2) 泊事件(横浜・泊事件)

戦前に、朝日町出身の社会運動を専門にした法学者細川嘉六がでっち上げ事件に巻き込まれた。これは、民主主義が危機に陥った近代日本最大の言論弾圧事件「横浜・泊事件」と呼ばれ、その後、粘り強い運動が展開された。詳しくは、文献1。

(3) 細川嘉六の業績

1918年の米騒動について、14年後(1932年)、米騒動の詳細を先駆的にまとめた論文によって、米騒動の歴史的意義が確立されたといわれている。

(4) 街のいま

・泊は宮崎・境も含めて文化の宝庫といえる土地柄もあって、今は若者が「消えてたまるか泊の街」として頑張っている。

・料理旅館「紋左」(写1)；

本旅館は北陸街道にほとんど直に面しており、宿場では唯一現存する旅館であり、歴史の舞台ともなった。築150年ほどの木造建築が歴史の証人として今なお健在である。広間では研究会がしばしば開催されている。

・朝日町は春の四重奏

空の青、朝日岳の白、桜のピンク、チューリップの赤や黄、の大パノラマで圧巻。(写真2)



写1 旅館「紋左」



写2 春の四重奏

3. 越中宮崎

境海岸の西隣の位置に(泊からなら東へ数kmの位

置に)、越中宮崎があり、ヒスイ海岸の町として知られている。越中宮崎のヒスイについては、糸魚川の姫川から流されてきたヒスイが宮崎浜にたどり着いたという説と、宮崎浜沖合にもともとヒスイ原石の岩脈があるという説とがある。未だにどちらなのか、決着はついていない。

4. 境宿

境は、先史期には石斧生産・加工地であったが、いつしか製塩の街として賑わい、近世に入ってから、越中の最東端の関所の街となった。

越中と越後の境目においては、交通の要所として越中側にも越後側にも関所が置かれ、越中側が境宿の境関所であり、越後側が市振宿の市振関所である。越後側は幕府の関所であり、高田藩が運営を担当していた。これに対して、越中側では加賀藩の関所として藩が運営し、関所の規模は箱根の倍規模であったといわれている。(写3)

なぜ、境の方が箱根より規模が大きかったのか。箱根は人通りも多く、民活故に軍事の面からの防衛危機はさほどでもなかったからであろう。これに対して境の場合、国境警備に重点を置くという名目で加賀藩が威信を誇示したことにより、関所が大規模になったといえよう。

関所の施設をみよう。境関所 HP 資料によると、海上渡航を改める浜関所、街道通行を改める御関所、

会場や山中での越境をみはる御亭、御旅屋、射撃場、牢屋、役人長屋などがあつたといわれている。関所の陣容は、奉行

から足軽まで60人。装備は、槍70、鉄砲70、弓30が備わっており、こうした装備は箱根の倍規模という。



5. おわりに

街道と宿場の生活営みを論じた。以下にポイントを記す。

・境を中心に石器文化(石斧)や装飾文化(ヒスイ)が全国に交易伝搬。近世の関所と共に、歴史文化を形成。

・泊では、富山の近代民主主義を息づかせた泊・横浜事件の歴史が垣間見られる。

謝辞：本稿では種々の専門家との談義を取材材料として活用させていただいた。関係各位に謝意を表する。

参考・引用文献：1)金澤敏子；一連の細川嘉六研究

5.2 障害者になってしまったら

すずき

2020年11月、私は脳出血で倒れ、左半身不自由と高次脳機能障害という障害をもつことになりました。この経験から、障害をもってしまったらどうすればよいかをお話ししたいと思います。

なお障害者には先天性と後天性即ち生まれつきの障害者と中途障害者がいますが、本稿では障害者福祉として重きをおかれる先天性ではなく後天性の障害者についてお話しします。

1. 障害受容のプロセス

突然何かが起こり、病院に運ばれ一時は意識もなく、意識があってもどこかに痛みを抱えている状態は、本人はもちろん周囲も皆ハラハラするでしょう。誰もがその状態から脱することを願い集中し、フィクションであればクライマックスのちハッピーエンドに向かうものの、本人にとっての問題はその後です。

意識が回復し落ち着いたところで、前と同じように身体が動くものだと思って動かそうとしますが動きません。脳に障害をもつていようがいまいがおよそ同様です。この時点では「何かおかしい」と思うだけで自分が障害をもつことになったとは思いません。人（主に病院関係者）に説明されて初めて、自分が障害をもっていることを知ります。

驚きます。自分が障害者になるなんて。意識の上では前と何も変わったとは思えませんので、すんなりわかるわけではありません。人によっては「そんなはずがない」と否定するかもしれません（私はなかった

ですが）。どんなに繰り返し説明されても、また頭では理解していても、気持ちの上では理解できない時期が続いていきます。

気持ちの上での混乱を抱えたまま、作業療法などを受けるよう指示されました。ほぼ否応なくでしたが、発症の初期はどれだけリハビリするかで後の後遺症の大小が変わってくるらしいので、無理やりでもしてもらえて有難かったと思っています。

心の内では早く治さなきゃと焦ったり、どうせ治らないと自暴自棄になったりもしました。進んだり戻ったりを繰り返しつつリハビリを続けていくうち、障害への適応に前向きに取り組めるようになりました。

今でこそ障害を受け入れています。発症から三年経った今でもつい発症前の習慣で動こうとし、でも動いていないのでバランスを崩してしまうことがよくあります。気持ちの上では十分に理解しているつもりでも、どこか身体がわかっていないかのようです。

このように「ショック期」→「否認期」→「混乱期」→「適応への努力期」→「適応期」といった障害者が障害を受け入れる心理的な過程を「障害受容のプロセス」というそうです。私は退院してずいぶん後になってからこのことを専門書で知り、ああもっと早くこういう過程をたどることを知っていれば、もう少し自分の状況を冷静に把握できたのにと悔やんでいます。

もちろん私に携わってくれた理学療法士などは当然ご存知だったことでしょう。でもだからといって「あなたは今混乱期にいるのでしばらくすれば適応期になり落ち着

くことができます」などと言われていたら怒ったかもしれません。そのため皆さんには障害者になる前に、このことを知っておいてもらえればと思います。

2. 二つのギャップ

中途障害者は「健康な状態」と「障害をもった状態」のギャップを体験することになります。このことは退院までだけでなく仕事に復帰するときにも、本人にも雇用者にも不都合が生じてきます。

本人はかつてできていたことは自信をもってできると思うのですが、できない。特に脳障害を患った人は自分が障害を負っているという認識が乏しいらしく、正確にやっているつもりなのに不正確になりがちだそうです（私がそうです）。雇用者からすると、本人は大丈夫と言っているがどうも怪しいと疑念を抱きます。もちろんこれは障害が原因で、本人の責任ではないし、ましてや不正確さを責める雇用者にこそ問題があると思います。

そのため雇用者には、短期的に評価し判断するのではなく、定期的に面談しかつ長い目で見ていくようお願いしたいです。とはいえどんなに良心的な雇用者や上司だったとしても、そんなに理解があるとは残念ながら思えませんので、「自分では大丈夫と書いていてももしかしたら正確にはできないかもしれない」と、復帰時点で自分から雇用者に訴えておく必要があるかもしれません。

このように、自分でようやく障害を受け入れたとしても、同じように周囲の人がわかってくれているとは限りません。勤務先ではもちろん、家族やヘルパーなど身近な

人も「当然わかってくれているはずだ」と思っても、わかっていなくてトラブルになることもあります。自分で何ができるのか、何ができないのかは本人にしかわかりませんので、認識の違いがわかった時点でできるだけ伝えるようにしましょう。

3. 「障害」という表記

最後に「障害」という表記について書いておきます。

「障害」は今にち、「害」を平仮名にした「障がい」や難しい字での「障碍」などがあります。これは「害」には悪いイメージがあるので「障碍」または「障がい」と表記すべきという主張が 2000 年頃から大勢を占めたために、だんだん「障害」表記を避けるようになってきたためです。現在は福祉関連の従事者を中心に「障がい」表記に統一する傾向にありますし、発症前は私もそれに従っていました。

ですが障害者となった今は、表記上／表面上は障害者に配慮しているけれども、実態は「社会の害になっている」と障害者殺傷事件を肯定したり「害をもっている人たちはかわいそう」といった“上から目線”で見下ろしたりする社会は何も変わっていないのではないかと、という印象があります。私は健常者でも障害者でも同等の目線で対話できる社会を理想としているので、そうなったと実感するまでは、訴える意図をもって、「障害」表記に拘りたいと思っています。

5.3 上市町での石造文化財調査の取り組み

富山石文化研究所 古川知明

本会で以前お話をさせていただいたとき触れた項目に、上市町齊ノ神新・田島野の「窪の地蔵菩薩」のことがありました。この石仏を調査した結果、明和4年（1767）の比較的古い石仏であることが判りました。私は石工の研究をしていますので、この地蔵様を作った石工について知りたいと思ったのですが、この頃はまだ石工が名前を刻むことは発生していなかったもので、当然この石工の素性は分からないままでした。

その後調査を依頼された方から、田島野字圀割の墓地に、寺跡らしい土地があるという情報もたらされたので、現地調査に訪れました。その地は寺跡ではなく、ある有力者の墓地跡であり、江戸時代の古い形状を良く残していました。そして敷地中央にある石積み基壇の上には、窪の地蔵様と同じ丸彫地蔵の墓石が立っておられました。

この調査をきっかけにして、周辺地に同類品が存在しないか確認に回ったところ、田島野字中長で舟形の石仏1体を確認しました。また上市町教育委員会の三浦さんから眼目山立山寺の墓地に似た石仏があるという情報をいただいて確認したところ、その墓地において2体の丸彫の墓石を確認しました。また寺の奥にある開山堂跡にも2体の丸彫の墓石がありました。

これらから得た特徴をもとにさらに調査範囲を広げたところ、立山町千垣に1体丸彫の石仏、富山市婦中町蔵島に1体丸彫の石仏があることがわかりました。蔵島の石仏の台座には、安永7年（1778）の刻銘があります。

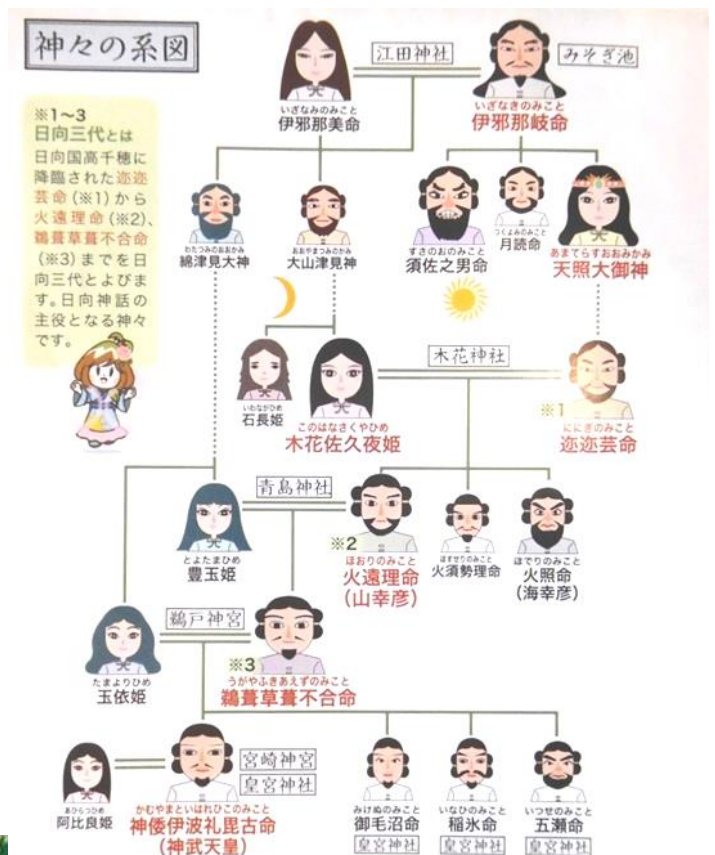
以上のことから、これらの石造地蔵菩薩（石仏・墓石）を作った石工は、18世紀第3四半期を中心に製作活動を行い、20km圏内に流通したことがわかりました。残念ながら本拠地はどこか判明していませんが、上市川流域から産出する砂岩をよく使っていることから、上市地域の石工ではないかと考えるようになりました。その後江戸後期に上市には、平井庄右衛門という石工が生まれました。彼は常願寺川石工中川甚右衛門に師事し、共同で製作して技を磨きました。

窪の地蔵菩薩から始まった地蔵菩薩探しの輪は、このようにどんどん広がりつつあります。紹介した所の周囲に、さらに見つかる可能性も大きいと思われます。類似した地蔵様を見かけられた方は、ぜひご一報ください。



これまで発行した報告書2冊。上市町立図書館で閲覧可能です。これ以降の調査の成果については、作成中です。

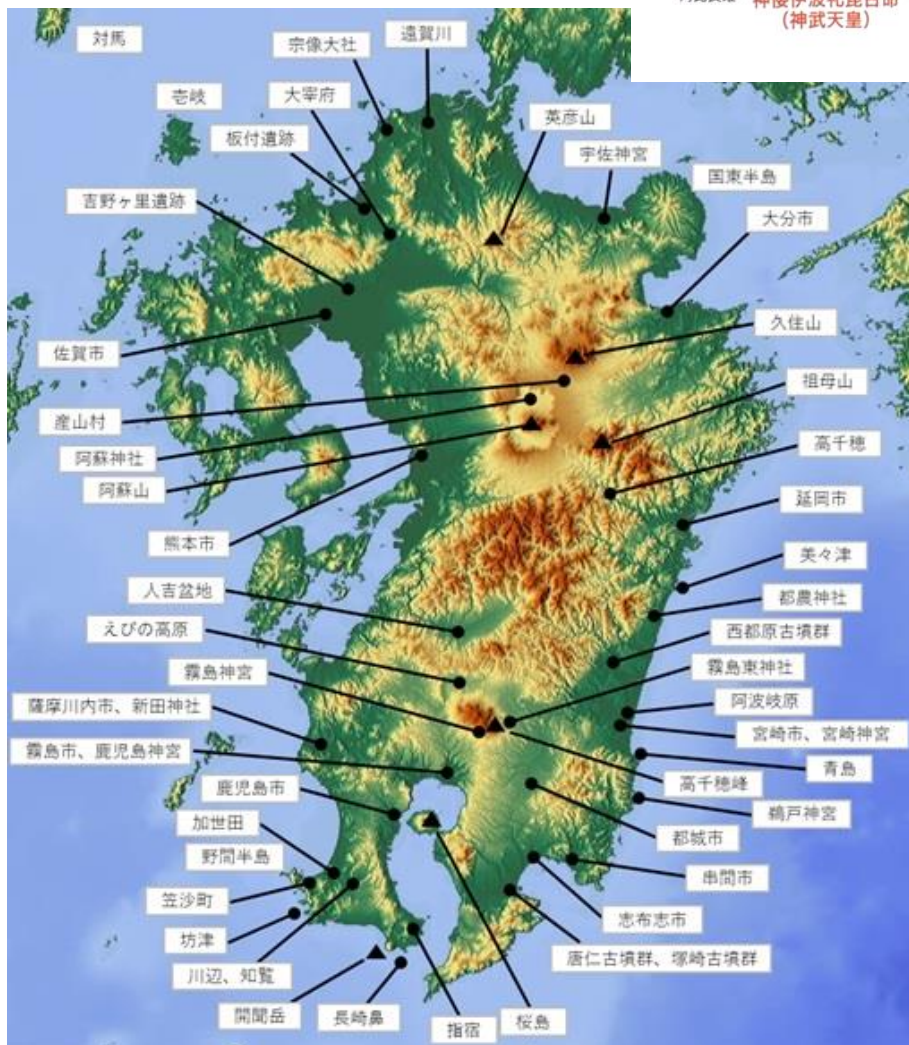
5.4 南九州 神話の旅 ; 富樫正弘



神々の系図 →

宮崎市観光協会パンフレットより

↓ 南九州神話地図



南九州神話の旅（1）

ヤマト（日本）神話の里を歩きたいと以前から思っていたが、ついに決行することになった。神話なんて空想話しと思いつつも、何だか惹かれるのは、同じ列島に生まれ育ったからか。そのおとぎ話の世界に行くなんて、最初からわくわく気分である。

〔多賀大社〕

その南九州に行く途中、滋賀県彦根の南東に位置する多賀町の多賀大社に寄った。国生み神話のイザナギとイザナミを祀っている。拝殿は横長の均整のとれた立派な建物で宇治の平等院に似ている。また全国が多賀系の二三三社の総本社でもある。だが、日本書紀によると、淡路島に隠れたりとあり、そこには伊弉諾（イザナギ）神社や幽宮（かくりのみや）がある。淡路ではイザナギは西の方からやってきたという伝承もある。

多賀大社の起源は、犬上氏の祖を神として祀ったとの説がある。それを裏付けるように、上流の大瀧神社には、激流の大蛇を稲依別王と犬の小石丸とが退治したという伝承が残る。稲依別王（いなよりわけのおう）は日本武尊（やまとたけるのみこと）の子である。また、多賀大社の一キロ南にある別宮の胡宮（このみや）は、青龍山（333m）を御神体として大きな磐座（いわくら）をもち、古代信仰に由来している。

多賀大社に国生みの二神が祀られたのは、一部の写本で「淡路」を「淡海」に取り違えたためとも云われている。淡路だろうが淡海（近江）だろうが、当時のヤマトの国の中ほどに位置していたのだから、国生み二神の鎮座するにふさわしい所であろう。それにどちらの神社の由緒も日本神話からの後付けに思える。

〔国生み神話〕

さらに旅を進める前に国生み神話を振り返っておかねばならないだろう。古事記や日本書紀（あわせて記紀という）によると、混沌とした状態から天地が分れると、独神（ひとりがみ）の時代が数代つづき、次に男女の双神（ふたがみ）の時代が数代つづいてイザナギとイザナミが現れる。

この二神が、天の浮橋から天の沼矛（ぬぼこ）を下に指して掻き回して引き上げると、矛の先から滴り落ちた塩が積もってオノゴロ島となった。その島に天降り、交わりをして大八島を生んだ。

古事記と日本書紀では内容に違いがあり、たとえば、最初に淡路島を生んだのは同じであるが、日本書紀では次に豊秋津洲（とよあきづしま、本州）を生み、古事記では最後に大倭豊秋津島を生み更に五つの小島を生んだことを加えている。

この二神は、続いてこの世の様々な神々を生むのであるが、古事記では、イザナミが火加具土神（ほのかぐつちのかみ）を生んだ時に焼け死んでしまうのである。そして黄泉国（よもつくに）の住人となるのであるが、愛しく思うイザナキはその後を追って会いに行く。しかし、その変わり果てた姿を見て汚（けが）らわしいと逃げ帰る。その穢（けが）れを笠紫（つくし）日向（ひむか）橘小門（たちばなのおど）の阿波岐原（あわきはら）で禊（みそぎ）をして身を清めたのである。その時、様々な神々とともに天照大御神、月読の神、速須佐男命（はやすさのおのみこと）が生まれる。一方、日本書紀の本文は、二神が山川草木の神々を生んでから、話し合いをして大日靈貴（おおひるめのむち、一書に天照大神という）、月の神、素戔鳴尊（すさのおのみこと）を生んだとしている。

〔沼島（ぬしま）〕

淡路島の南端、5km ほどの海上に沼島がある。連絡船に三十分乗ると、周囲わずか 10km の島に着く。島のほとんどは山で、家々は港の周辺に屋根を寄せ合っている。島内には、漁港近くの丘上におのころ神社が、裏手の海辺には天の御柱とみなされている高さ 30m の上立神岩が立っていて壮観である。近くの鳴門海峡では、天の沼矛で掻き回したかのような渦潮がみられる。

〔瀬戸内海フェリー〕

大阪や神戸から九州方面へフェリーが出ている。いずれも夜に出航して朝に着く。私は神戸（19:00）から大分（翌朝 6:20）の航路を選んだ。レストランで酒を飲みながら夕食をしていると、窓外の闇では山陽の町や工場の明かりがゆっくりと後方へ動いていく。風呂やラウンジもあるし、手持ちの本を読んだりしているといつの間にか寝る時間になる。瀬戸内海は太古から現在まで主要な交易路となっている。

〔高千穂〕

高千穂の地は標高 350m 前後の所に広がっている。周囲を低い山々で囲まれた天空の桃源郷である。上市町の山間部にある種集落の標高が 300m

であり、山に囲まれた盆地状というのも似ている。ただ、高千穂はもっともっと広々としていて明るい。この地は宮崎県の北西端、県境近くの山奥で、ここに至るには四つのルートがある。大分市から大野川を遡って山越えで入る北ルート（道が狭いのでお勧めはできかねる）、延岡市から五ヶ瀬川を40kmほど辿る東ルート、熊本県から県境を越えてくる二つの西ルート、その一つは阿蘇カルデラ内の南阿蘇村を通ってくる。

高千穂の町役場は五ヶ瀬川の北東にある。町並みの規模は上市とほぼ同じである。山奥の辺鄙で神秘的な所かと思っていたが、今や観光地としてすこぶる新しい街並みになっている。町周辺には高千穂峡と真名井の滝、高千穂神社、櫛觸神社（くしふるじんじゃ）、北西に眼を向けると天孫ニニギノミコトが国見をしたという国見が丘、南西方向には天孫が降臨したという二上山（ふたがみやま、989mの双耳峰）が望める。また、役場から8kmほど北東に行った岩戸川沿いには、天岩戸神社、天安河原があって、これで神話の舞台が一通り揃っているといえよう。

〔天岩戸と天孫降臨〕

ここでまた、神話の世界に戻ってみよう。イザナギは、アマテラスに「天を治めよ」、ツクヨミに「夜の世界を治めよ」、乱暴者のスサノオには「遠い根の国へ行きなさい」（当初は海原を治めさせたかった）と言った。それでスサノオは姉のアマテラスに別れの挨拶をするために天に昇ったのだが、そこでも乱暴狼藉を働いた。これに立腹したアマテラスは天岩屋に入って岩戸を閉じたので国中が闇になった。困り果てた八十万（やそよろず、八百万（やおよろず）ともいう）の神々は天安河（あまのやすかわ）に集まって思案した結果、岩戸の前で天鈿女命（あまのうずめのみこと）の踊りを中心とした賑やかな祭祀を行うことにした。その笑い声につられて、アマテラスが岩戸を少し開けて覗いた時に、手力雄神（たちからおのかみ）がアマテラスの手を取って引き出して、布刀玉命（ふとだまのみこと、忌部（いんべ）の遠祖、中臣と並ぶ宮廷祭祀役）が中へ戻れないように標縄（しめなわ）を引き渡したので、天地がふたたび明るくなった。神々は、スサノオに罪滅ぼしの品々を供える罰を与え、髪や手足の爪を抜いて、高天原から追放した。詳細は本書（記紀）を参照のこと（今に続く当時の神社祭祀の様子が目の前に展開する

であろう）。

〔天岩戸神社と天安河原〕

五ヶ瀬川の支流である岩戸川にも深い溪谷部があり、それを挟んで天岩戸神社の西本宮と東本宮が鎮座している。西本宮は対岸の高さ100m余りの崖中にある天岩戸を参拝する神社で、それは川から50mに位置し、幅18m、高さ18m、深さ9mの洞窟である。東本宮は天岩戸から出たアマテラスが住んだ場所に建っている。

西本宮から上流に崖を下りながら二〇分ほど歩いた穏やかな溪流の縁に、天安河原が間口幅40m、入口高20m、奥行き30mの洞窟としてある。溶岩洞が岩戸川の水により溶食されてできたものという。多くの神々が集まれる広さはないが、代表が集まり談議をするにふさわしい場所であり、沢の瀬音が神々の語り合う声に聞こえたのは私だけではなかろう。

それにしても天上界の物語の場所が地上にあるとは……不可解な事だ。

南九州神話の旅（2）

〔天孫降臨までのヤマト神話〕

天の国を追われたスサノオは出雲の肥の河上（今の斐伊川上流）、鳥髪に降り立った。その地でヤマタノオロチを退治して、クシナダヒメと夫婦になってこの地を治めた。その子のオオクニヌシ（古事記ではスサノオから七代目）が出雲のクニを大きく発展させた。

ところが、アマテラスは「葦原の水穂の国は我が子オシホミミが治めるべきである」として、天穗日命（ホヒ）、ホヒの子、天稚彦（ワカヒコ）を次々にオオクニヌシの所へ遣わしたが、いずれもオオクニヌシに取り入って返事をしてこなかった。そこで経津主神（フツヌシ、香取神）と武甕槌神（タケミカヅチ、鹿島神）を派遣して、力づくで出雲に国譲りをさせた。（古事記では経津主神ではなく、天鳥船神が派遣されている）。

地上界が鎮まったので、アマテラスは孫のニニギに天児屋命（コヤネ、春日神）などの頼りになる神々をつけて天降りさせた。そしてニニギ一行は日向の襲（そ）の高千穂の峯に降り立った。

（古事記では笠紫の日向の高千穂の久志布流多氣に天降りしたと記されている）。

記紀は、天皇家がこの国を治める正当性と共に、

藤原氏がそれを支える臣下の筆頭である正当性も含めているようだ。むしろ、藤原氏がこの物語を利用したのかもしれない。天智天皇に仕えた中臣鎌足は、その功績が高く、死の直前に天皇から藤原の姓を賜り、その姓は嫡子である不比等の家系にのみ引き継がれた。不比等の孫である永手は、平城京を守護する為として七六八年に春日大社を創建した。第一殿には白鹿に乗って来たとされる鹿島の武甕槌命（常陸国一の宮）、第二殿には香取の経津主命（下総国一の宮）、この二神を藤原氏の守護神として祀っている。第三殿と第四殿には天児屋根命と妻の比売神（枚岡神社、河内国一の宮、中臣氏の祖神）を祀っている。これらの神々は国譲りと天孫降臨の場面で重要な役目を果たしたのだ。

〔天孫降臨の地、高千穂〕

高千穂町に天孫降臨の地は二つある。

そのひとつである二上山（ふたがみやま、989m）については、鎌倉時代の「万葉集註釈」（1269）や「釈日本記」（1274）に日向風土記から引用した「日向の高千穂穂二上峰に天降った」という記述が残っている。残念ながら日向風土記は写本すら残っていない。

もうひとつの伝承地である穂觸神社（くしふるじんじゃ）は町並みの東にあり、元禄七年（1694）に社殿が建立されるまで、古くから「くしふる峰」（すぐ背後の山だとすれば標高 420m）をご神体としてお祀りしていた。瓊々杵尊（ニニギ）をはじめとする天降り神話の神々が祀られているこの神社周辺には、神武天皇と兄弟誕生の地と伝えられている「四皇子峰（しおうじがみね）」や、天孫降臨に従った神々が高天原を遥拝した場所などがある。他にも、役場の北方 1km にはニニギの孫であるウガヤフキアエズ（神武天皇の父）の墓とされる吾平山稜（あひらのやまのみささぎ、径 20m の円墳）がある。

〔日向三代と神武の兄弟〕

高天原から天降りをした天津彦火瓊瓊杵尊（あまつひこひこほのににぎのみこと、初代）は、よきクニを求めて不毛の地を進むと、吾田（あた）の笠紗御前（かささのみさき）で木花開耶姫命（このはなさくやひめ、神吾田津姫）に出会った。そして第一子の火照命（ホデリ、海幸彦、隼人阿多君の祖）、第二子の火須勢理命（ホスセリ）、第三子の火遠理命（ホオリ、山幸彦、神武の祖父）が

生まれた。薩摩半島に吾田（あた、阿多）の地名が残り、そこから西に突き出ている野間半島を笠紗御前に想定している。片や、宮崎県日南市にも吾田（あがた）という地名がある。

ホオリ（二代目）は兄のホデリから借りた釣針を失くし、それを探して海神（わたつみ）の宮にたどり着くと、豊玉姫（とよたまひめ）と相思相愛になり三年の時を過ごした。それから浜に帰って兄に釣針を返した。この時も兄弟の争いが起きたが、兄は完敗して弟に仕えることを誓った。その後、臨月になった豊玉姫はホオリの子を産むために浜にやってきた。産屋で出産する時に鰐（わに、サメ）の姿になったのをホオリに覗かれて恥ずかしく思って、産後すぐ海に帰っていった。子は彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊（ひこなぎさたけうがやふきあえずのみこと）と名付けられた。宮崎県日南市の鶴戸神宮は豊玉姫が出産した洞窟と伝えられている。そして豊玉姫の妹である玉依姫（たまよりひめ）が、この子を養育した。

ウガヤフキアエズ（三代目）とこの玉依姫が結婚して、五瀬命（イツセ）、稲氷命（イナヒ）、御毛沼命（ミケヌ、三毛入野命）、若御毛沼命（カムヤマトイワレビコ）を産んだ。

ニニギの墓は、筑紫（つくし）の日向の可愛（え）の山陵。古事記には墓所の記載なし。

ホオリ（天日高日子穗穗出見、彦火火出見尊）の墓は、日向の高屋（たかや）山上陵。古事記には高千穂の山の西にあると記されている。

ウガヤフキアエズの墓は、日向の吾平（あひら）山上陵。古事記には記載なし。

〔高千穂峡と高千穂神社〕

高千穂峡は、その昔（十二万年前および九万年前）、阿蘇火山から噴出した火砕流が五ヶ瀬川に沿って帯状に流れ出し、それが急激に冷却されて溶結凝灰岩の柱状節理となって峡谷を形成したという。100m 近くの断崖が 7km にわたり続いており、その内 1km が遊歩道になっている。ここの柱状節理は大きく形がはっきりしているのでなかなか見応えがあり、流れも深く青い。その溪谷が最も狭まり薄暗くなったところに、一筋の真名井の滝（落差 17m）が絹色の水を落としている。これがまた高千穂の神秘性を高めているのである。

溪谷の近くに高千穂神社があり、一之御殿（いちのごてん）には高千穂皇神（たかちほすめがみ）、二之御殿には十社大明神が祀られている。高千穂

皇神は日向三代と称される皇祖の神々とその妻神をまとめた呼称で、十社大明神は神武天皇の兄である三毛入野命（みけぬのみこと）とその妻や子ら九柱の神々である。

三毛入野命は、ヤマト神話では神武東征の時に高浪を踏んで（海嵐の際に）亡くなっているが、高千穂の伝承では、この地に戻り荒らぶる鬼神の鬼八（きはち）を退治して、この地を治めたとされている。その後、高千穂（高知尾）を名乗り、鎌倉時代後期からは、高千穂の中心地の地名を受けて三田井氏と称した。

高千穂地方の古墳は一一六基以上あり、宮崎県の山間部では多い方である。それらは三田井地区の吾平と吾平原に最も多く築かれている。横穴式古墳や円墳がほとんどであるが、小規模ながら前方後円墳も六基あることから、古くから開けていたのであろう。七〇〇年ころ、高千穂は、日向国臼杵郡智保に一八村と肥後阿蘇郡知保に四二村を含む地域の総称であったとされる。「高千穂」が改名されて「智保」や「知保」になったのは、七一三年に一字や三字の地名は二字の嘉名（かめい、縁起の良い名前）にせよという令が発せられたからと推察されている。

古代の交易ルートを想像するのに、まずは近現代の鉄道ルート、次に主要道路が参考になるであろう。熊本から大分までは阿蘇外輪山の中を走って豊肥本線が走っている。大分からは佐多岬半島に沿って愛媛の松山から瀬戸内海に入れる。熊本から阿蘇高森、高千穂から延岡、この間にもそれぞれ鉄道が通っていた。ただ宮崎側の五ヶ瀬川（ごかせがわ）は深い溪谷が続く難所である。それでも延岡に出て豊後水道を渡れば高知から和歌山につながる南海道に入れる。今でも異境の地を結ぶルートは珍しき物が行き交う魅力的な道である。地の利がある高千穂だが、中央を流れる五ヶ瀬川が深い谷を成しているのので、広い耕作地を開拓することはできなかっただろうと、国見の丘から眺めて想像した。

南九州神話の旅（3）

〔延岡市はニニギの里〕

高千穂町で、天岩戸、天孫降臨、神武四兄弟の伝説を回想した私は、五ヶ瀬川（ごかせ）に沿って延岡市に下った。延岡市は日向灘（太平洋）に臨

む宮崎県第三の都市である。

天孫ニニギは五ヶ瀬川を下って笠沙の御碕（愛宕山）にきた時、美しいコノハナサクヤヒメを見初めて、その父の大山津見神（オオヤマツミ、大山祇神、大いなる山の神）の許しを得て妻にした。現在の愛宕山（251m）は延岡の中心部にあるが、古代は海に突き出た半島で笠沙御碕あるいは笠沙山と呼ばれていた。さらに延岡の北方8kmにある可愛岳（えのだけ、727m）は、山頂に鉾岩（高さ1.7m）が立ち、古代日向の人々に崇められていたという。山麓の長井俵野にある経塚古墳一帯はニニギ終焉の地と伝えられており、宮内庁の北川陵墓参考地になっている。

延岡市の北には祝子川が流れていて、これは「ほうりがわ」という。日向二代目のホオリノミコトを思わせる。そういえば五ヶ瀬川も神武の兄の五瀬命と関係があるのかも…。ただ、この命名が記紀編纂の前か後かという事ははっきりしなければ何ともいえない。

延岡市の西15kmの五ヶ瀬川沿いの北方町には、ニニギに先立って降臨したニギハヤヒにまつわる速日の峰（868m）がある。このニギハヤヒは神武が奈良盆地に進攻した時に奈良の地を先に治めていた尊である。日本書紀によると、ニギハヤヒは天磐船に乗って奈良の地に天降ったという。物部氏の祖とされている。こうなってくると時の流れの前後関係が錯綜してくる。これが神話の時空なのだろうか。

高速道路の延岡インター近くに南方古墳群（みなかた）があり、天下神社（あもり）境内にはササノ尊墓と伝わる一号墳（前方後円墳、L=70m）があるが、目を引いたのは社殿の裏にある小さな方墳である。説明書きにはニニギノ尊墓となっているが、なんと盛土の半分が欠けている。それでもニニギがもし存在していたとすれば、古墳時代よりずっと昔であるから、墓の大きさもこの程度というのがかえって信憑性がある。

〔神武東征軍が出航した美々津〕

「津」の多くは港を意味する。美々津（みみつ、耳川）は延岡の南30kmにある小さな港町であるが、その町並みは重要伝統的建造物群保存地区となっていて古くから栄えた様子がうかがえる。港のそばの立磐神社には神武の腰掛岩が残っている。当時、航海の安全を祈願して海の守護神である底筒男命、中筒男命、表筒男命の三神を祀ったという。

後に神武も祭神として加えられたのであろう。この港はどこにでもある漁港程度の大きさしかないが、その北方の門川港（かどがわ、五十鈴川）の入江ならば東征の大軍が終結できるほどの広さがある。この地域は、砂浜が長く続く日向海岸にあっては貴重な港湾拠点であったと想像できる。

神武らの本拠地はいったい何処であったのだろうか。そこは美々津より南だったと考えるのが、理にかなっている。遠征へ向かうのに一旦、大きく後方に下がることはないだろうから。宮崎県北部には大きな勢力を養えるような平野部はない。この地方では県中央部の宮崎平野が圧倒的な広さをもっている。これから南下するにつれ日向三代の跡も明らかになるだろうと先を急いだ。

〔日向一宮、都農神社〕

美々津から 10km 南の農園地帯の中に都農神社（つの）がある。日向国一宮であるから、祭神はアマテラスか神武と想像していたが、意外や意外、大己貴命（おおなむちのみこと、大国主命）であった。しかも神社の別名は宮崎宮。境内にある摂社も、素盞鳴神社（スサノオ）と手摩乳・足摩乳神社（テナヅチ・アシナヅチ）で出雲国に所縁が深い。

日向国の式内社は都農神社、都萬神社、江田神社、霧島神社の四社で、これらは九二七年に編纂された「延喜式」に記載された神社である。にもかかわらず都農神社は広い境内をもたず、富山県で有名な神社の半分ほどである。戦国時代の太田と島津の戦いによって全て焼け落ち、その後、江戸期の高鍋藩秋月氏（三万石）に再興されるまでは小さな祠であったという。秋月氏の発祥地は筑前であったので、出雲と関係はなさそうである。由緒ある神社であるが、その由来を知るに足る情報はなかった。

〔西都原古墳群〕

都農から山近くの道を約 30km 近く走って、西都原（さいとばる）に向ったが、辺り一帯畑地が多かったのは意外だった。南の方は米作りに適していると学校で習っていたからだ。宮崎平野は海岸線を底辺とする三角形をしている。富山平野より広い。そこに古墳群が点在していて、古代に発展していたことをうかがわせる。西都原の手前にも、畑の中に広く墳丘が点在する茶臼原古墳群があった。

西都原古墳群は、宮崎市の北北西 20km に位置す

る。南北 4km の範囲に三一一基の古墳が集まっていて、そのほとんどが円墳であるが、前方後円墳が三基あり、中でも女狭穂塚古墳（めさほづか、L=176m）は九州最大である。それと並んで作られている男狭穂塚古墳（おさほづか、L=176m）は帆立貝型古墳である。この二つの墓については、コノハナサクヤヒメとニニギ説（陵墓参考地）、仁徳の妃である髪長媛とその父である諸県君牛諸井（もろかたのきみうしろい）説がある。古墳の造営は五世紀前半なので、後者の説の方が現実的であり、明治になされた宮内庁による治定（じじょう）はもはや時代遅れと思われる。

九州の南東部には極めて地域色の強い地下式横穴墓が多くつくられている。まず縦に穴を掘ってから横方向に墓室を形作っているのである。確かに他の地域では見ない構造だが、私感としては殷墟や始皇帝陵など大陸の墓に近いように思った。

古墳群の東方に都萬神社（つま、式内社）が鎮座していて、ここの祭神は木花開耶姫命（コノハナサクヤヒメ）である。

〔阿波岐原〕

宮崎市北の郊外、砂浜が続く海岸線にかの有名なシーガイアリゾートがあり、その辺り一帯は松林が広がる公園として多くの市民に親しまれている。この林の中にイザナギが禊（みそぎ）をしたという伝承地・阿波岐原（あはきはら）が周囲 300m ほどの御池（みそぎ池）として残っている。程よい流れである中ノ瀬で身を清めたという。今は 300m 南の湧水地から小さな江田川が流れている。その近くには、イザナギを祀っている江田神社（えだ、式内社）が建っていて、後にイザナミも合祀した。それから、この辺りは宮崎でも早くに稲作が始まったという。これは貴重な情報である。それに、ここではアマテラスやスサノオの他にも住吉三神など多くの神々が生まれ、古くからの住吉神社もある。今、住吉の総本社は摂津国一之宮として大阪市の住吉区に鎮座している。

阿波岐原の北東の一ツ瀬川近くに佐野原神社（さのばる）があるが、この辺りにウガヤフキアエズの宮があり、神武四兄弟が誕生したという。

〔宮崎神宮〕

宮崎市内には、神武天皇が東征するまで住んでいた宮跡の皇宮神社と、神武天皇および相殿にその父母神を祀る宮崎神宮がある。社伝によれば、後に九州に下向してきた皇孫の建磐龍命（阿蘇神

社の祭神)がその縁にちなんで創祀したとある。古くからの社(やしろ)だが詳しい由緒は不明で、明らかなのは当地の地頭・土持氏(つちもち)が鎌倉時代の一八九七年に皇宮屋(こぐや、皇宮神社)から遷して社殿を造ったのが始まりで、最近では明治四〇年に社殿が建て替えられた。奈良の橿原神宮と似て神社創建の典型的な経緯を見たような気がした。

神宮本殿の背後に船塚古墳(ふなつか、前方後円墳、L=84m、h=16m)というのがあるらしいが、木々が茂っていてその姿を見ることはできない。また、発掘調査がなされていないため、出土物による年代特定はできておらず、墳丘の形から古墳時代後半の築造とみなされている。

南九州神話の旅(4)

〔青島〕

宮崎市を南に出るとコノハナサクヤヒメが三皇子を出産した所と伝える木花神社(きばな)がある。

さらに南に行くと青島がある。祭神は三皇子の一人であるホオリ(山幸彦、日向二代目)と妻のトヨタマヒメ(海神の娘)である。島全体が境内となっていて緑の樹々におおわれている。島の周辺は茶色い鬼の洗濯岩に囲まれていて、その向こうは水平線の彼方まで青い海が広がっている。

ホオリの生誕伝承地は宮崎市の北東にもある。そこには今、王楽寺が建っている。その北にある瓜生野八幡神社(うりゅうの)はホオリの御陵(みささぎ)であり、王楽寺の南には天岩戸と伝える洞窟をもつ磐戸神社がある。

〔鵜戸神宮〕

青島は宮崎市から15kmの位置にある。ここから山が迫った海岸線を15km南下すると、鵜戸神宮(うど)に至る。15kmとは上市駅から富山駅ほどの距離である。奇岩が並び立つ海原に面した断崖の中腹、40m×30m、高さ8.5m、その海食洞の中に朱塗りの本殿がすっぽりと納まっている。このような神社は今まで見たことがない。豊玉姫が日子波瀲武鸕鷀草葺不合尊(ひこなぎさたけうがやふきあえずのみこと)を出産した場所である。ウガヤフキアエズは日向三代目で、神武天皇の父君である。それにもかかわらず記紀の記述は数行で終わっている。神宮の背後の速日峯(はやひのみね)

頂上には、この尊の吾平山上陵(あひらやまのうえのみささぎ)がある。

〔串間の玉壁〕

鵜戸から日南市に出ると少しは開けた土地になる。さらに山がちの低い峠を越えると県最南の串間市に着く。ここで神話が途切れた。

ここは市であるが、滑川市の海岸通りほどの町並みが急な崖に圧迫されながら細長く延びている。崖の上は台地であるが、その中を幾つかの川が深い谷となって流れている。それで村々は川を越えて直接行き来できず、一度町並みに降りてきてから、また上り返すのだという。ここはシラス台地の一端で、南九州の絶えざる火山活動の火砕流が半固結して地層を成した結果という。

この地の王之山で玉壁が出土したと伝わる。直径33cm、中央の穴径が6.5cm、厚さ0.6cm、1600g、硬玉製で、レコードのLP盤を一周り大きくした形である。西都原考古博物館に複製品があったのを見てきたが、黄金に近い色で壁の表裏両面に、竜首文、穀粒文、鳥文が見事に彫られていた。実物は加賀藩の前田育徳会(東京都目黒区駒場)が所蔵している。

玉壁の由来は箱に裏書きされていて、「一八一八年、日向国那珂郡今町の佐吉という農夫が掘り出した石棺中に、玉類や鉄器三十余品と共にあった」という。この玉壁が、北海道や樺太を探検調査したことで有名な松浦武四郎の手に渡った。かれは北海道以外にも日本各地を歩いて一五一冊もの調査記録を残した人で、晩年は古物や骨董品の収集を趣味としていたのだ。武四郎から加賀藩への譲渡経緯ははっきりしないが、前出の箱の裏書には明治十年(一八七七年)十二月とある。

玉壁が出土したという事は尋常なことではない。これだけの大きなものは日本では他に出土していない。福岡県で二つ三つ出ているが四センチに満たないもので、しかもガラス製である。玉壁は、大陸の長江下流域で五千年前ころに栄えた良渚文化(りょうしよ)に源をもつ。古くは祭祀に用いられたが、周から後は王侯クラスの宝物となった。串間の玉壁と似たものが、中国広州市の南越王墓(BC124 没)や河北省の満城漢墓(前漢の中山靖王劉勝の墓、BC113 没)から出ていることから、その価値が想像される。また、紀元前2世紀に作られたと考えられる。

これほどの貴重なものがなぜ、この辺境の地に

あったのか。もう一つの疑問は王之山という地名が今町に見当たらないことである。江戸期の今町は穂佐ヶ原あたりまでの広い範囲であったが、それでも見当たらない。石棺から見つかったのだから、その石棺が見つければよいのだが…。

ひょっとしたら、隼人の国々は先進地域だったのかもしれない。それで奈良時代まで他からの侵入を防ぐ力があつたとも考えられる。

〔日向国の範囲〕

飛鳥期以前の日向は、今の鹿児島県を含む範囲であった。隼人を制圧する過程で、七〇二年前後に薩摩を分離し、七一三年に大隅を分離した。それで鹿児島県の人々は、ヤマト神話の伝承地は大隅や薩摩にもあつたという。日本書紀が完成したのは七二〇年であるから、その時点での日向国は今の宮崎県の範囲である。ただ編纂時に言い伝えられてきた内容をそのまま書き記したとすれば、日向国は鹿児島県も含めての範囲になる。その後の九二七年にまとめられた延喜式では、日向三代の三陵は日向国に在りとしている。しかしこれとて決め手にはならない。

神話の中で息づいていた日向三代の三山陵は、明治の初めに改めて治定された。薩摩藩の人たちは、大政奉還や戊辰戦争で長州や肥前とともに大いなる貢献をして、多くが新政府の中心に入り、神国の形成にたずさわった。その際、皇祖にあたる日向三代こそ我が県にあつたのだと定めた。

それで今では、初代ニニギの可愛山稜（えのやまのみささぎ）は、薩摩半島付け根の西海岸に面する薩摩川内市（さつませんたい）宮内町に建つ新田神社（にった）の裏にある。二代目ホオリの高屋山上陵（たかや）は、薩摩半島付け根の山中、霧島市の北西 10km の霧島市溝辺町（みぞべちょう）の神割岡の頂（標高 393m）にある。三代目ウガヤフキアエズの吾平山上陵（あひら）は、大隅半島の中央部である鹿屋市吾平町を流れる始良川（あいら）の中州の島にある。これらの山稜は、太平洋戦争後の神話崩壊に伴い県民の間でも否定的になっている。ただし宮内庁の陵墓参考地として未だに立ち入りが禁じられている。

〔霧島の高千穂峰〕

半信半疑とは言いながらも神話はそう簡単に消えゆかないのである。なにせ二千年近くもの長い間、ずっと伝承されて来た神々の話しだからである。それに全く分からない遠い遠い昔について

具体的な物語りを見せてくれる。一九五〇年代から考古学の成果がたくさん出てきているが、生き生きとした内容は未だに語られていない。

九州の南部で最も有名な神話の地は霧島の高千穂峰（1574m）であろう。南東の都城市（みやこのじょう）や東の方角から天に突き上げる秀麗な鋭鋒を望むことができる。山頂に天逆矛（あまのさかほこ）が突き立てられていて、それが天孫降臨伝承に真実味を醸（かも）し出している。霧島の名の由来は、山の周辺が盆地なので霧がかかりやすく、その時、雲海の上に山頂が島のように見えるからという。霧島の命名のいきさつは分つたが、肝心の高千穂峰の名の由来や名付けられた時代については知ることができなかった。山頂の天逆矛についても不明であった。

「続日本後紀」に日向国諸県郡（もろかた）の霧島岑神（読みは、きりしまみねのかみ？）が八三七年に官社に預かつたとあり、これが霧島神の最初の記録である。その後、村上天皇の頃（在位 946-967）、天台宗の僧である性空上人（しょうくう、910-1007）が山麓に庵を結び、山中の様々な場所に分散していた信仰を霧島六社権現として六の権現社にまとめ、霧島山を修験の場にした。各社にはアマテラスから神武までの皇祖神やその妻神がそれぞれに祀られているが、霧島岑神が皇祖神として分かれ祀られた経緯ははっきりしなかった。高千穂峰の山頂直下の西に御鉢（火口跡）があるが最初はそこに社が建てられていた。それが、度重なる噴火焼失の後、島津氏が再興して霧島神宮とし、さらに「東社」（霧島東神社）と「西社」（霧島神宮）とに分けたといわれている。

南九州神話の旅（5）

〔霧島山周辺の神話伝承と六所権現〕

霧島六所権現社の一つである東霧島神社（つまりきりしま、宮崎県都城市高崎町）は高千穂峰の南東にあり、主祭神の伊弉諾尊（いざなぎのみこと）と共に十握の剣（とつかのつるぎ）を奉斎している。

同じく権現の一つである狭野神社（さの、宮崎県高原町）は高千穂峰の北東にあり、神日本磐余彦天皇（かむやまといわれひこ、神武天皇）を主祭神としていて、社名の由来は神武天皇の幼名「狭野尊」に因むと伝える。神武は高千穂峰の麓の権現洞で生まれたとされていて、その誕生の地、皇

子原に最初の社が建てられたという。

この六所権現社の中で最も知られているのは、鹿児島県霧島市に鎮座する霧島神宮で、高千穂峰の南西斜面の中腹に鎮座し、広い境内をもっている。主祭神は天饒石国饒石天津日高彦火瓊瓊杵尊（あめにぎしくににぎしあまつひたかひこほのくにぎのみこと）である。霧島神宮から更に車で登っていくと、霧島連山の南の登山口にある古宮址（ふるみやあと、標高 970m）に行くことができ、高千穂峰も間近に望める。

霧島東神社（きりしまひがし、宮崎県高原町）は、高千穂峰の東面中腹（標高 500m）にあり、主祭神は伊弉諾尊（いざなぎ）と伊弉冉尊（いざなみ）である。および高千穂峰の山頂に天逆鉾（あまのさかほこ）を祀っている。山麓には高千穂峰を青く映す御池（周囲 4km、火口湖）がある。

高千穂峰の北方に霧島岑神社（きりしまみね、宮崎県小林市）があり、祭神は日向三代の夫婦神六柱であるが、社名および霧島中央権現とされていることからすれば、本来は霧島山の神を祀っていたと思われる。元々古くは高千穂峰とそのすぐ西の御鉢（火常峰ひけふのみね）の中間地点の瀬多尾（せたお）に社殿があったが、度重なる噴火によって何度も消失したので、明治の初めに同じく霧島六社権現に数えられていた夷守神社（ひなもり）の跡地に、遷座および合祀して現在に至っている。夷守とは辺境の重要な拠点を守る長（おさ）のことで、邪馬台国連合の北九州の国々にヒナモリという副官がいたことが出ている。また各地に地名としても残っている。なお、霧島山頂での神事は雨乞い儀式であった。

〔霧島市〕

霧島山地の南、鹿児島湾（錦江湾きんこうわん）の最も奥に鹿児島県第二の人口をもつ霧島市がある。ここは大隅国の国府や国分寺が置かれていた中心地であった。大隅国の式内社五社のうち、四社が霧島市にある。もう一社は屋久島にある。一之宮の鹿児島神社は天津日高彦火火出見尊（あまつひたかひこほほでみ、山幸彦）と豊玉比売命（とよたまひめ）を祀っていて、この地の高千穂宮で五〇〇年の間、農耕を開拓し漁労を盛んにして繁栄の基礎をつくったと讃えられている。

宮浦神社は神武天皇、天神七代一二柱、地神五代五柱を祀っていて、北方の若尊鼻（わかみこのはな）という岬は神武天皇が幼少期を過ごした所

という。

南九州はヤマト神話の地であるにもかかわらず、霧島市の他の式内二社は出雲系の神々を祀っている。宮崎県の一之宮である都農神社とともに不思議な事に思えた。ここから日本海側の出雲はあまりにも遠いからである。ひょっとしたら、出雲神話は南九州の逸話かも知れない。

〔鹿児島市〕

島津氏は鎌倉時代の初めに南九州の守護職になり、以来、この地に影響力を持っている名門である。南北朝の争いの一三四〇年ころ、南朝方の東福寺城（鹿児島市）を攻め落として、大隅からこの近辺に拠点を移し、関ヶ原合戦の後の一六〇二年に現在の鹿児島城を居城とした。

鹿児島市で神話に出会わなかったが、家に帰ってから調べると、桜島の港に月讀神社（つきよみ、鹿児島市桜島横山町）があるのを知った。月読命（ツキヨミノミコト）の他、日向三代の神々を祀っているのだが、その中の木花咲耶姫命（コノハナサクヤヒメ）が桜島の名の由来になっているらしい。大正三年（1914）に起きた桜島の大噴火により神殿や御神宝などが溶岩中に埋れた。この時、桜島が大隅半島と陸続きになったし、島全域が二〇センチ以上の降灰に覆われ、厚いところでは二メートルを超えた。桜島東部の黒神集落では、その時埋もれた神社の鳥居が今もそのまま残っている。

〔薩摩半島南端の指宿市〕

霧島市から鹿児島市までは三〇キロ、鹿児島市から半島南端の指宿（いぶすき）へは更に四〇キロ走らなければならない。さすがの桜島も随分小さくなる。

指宿から低い峠を越えて池田湖に寄り、そこから開聞町（かいもんちょう）に向かうと「玉乃井」という小さな井戸があった。日本最古の井戸であるとのこと。ある日、トヨタマヒメが水をくんでいると、兄の釣針をなくしたヒコホホデミノミコト（山幸彦）が、これを探しながらやって来た。そして互いに惹かれ合って結ばれたという。

枚聞神社（ひらきき）は薩摩に二社しかない式内社で、かつ薩摩国一宮である。大日靈貴神（おおひるめのむちのかみ、天照大御神）を正祀とし他に皇祖神を合わせ祀っている。社殿の後方には開聞岳（かいもん、924m）が間近に見えている。本殿の裏の「清所」は豊玉姫の御陵という言い伝

えもある。

開聞岳の山頂は岩が積み重なっていて、視界が良い日は種子島や屋久島が見えるという。その直下に奥宮である御獄神社があった。赤い鳥居の神額（扁額）には、「嶽」ではなく「獄」という字が使われていた。

〔長崎鼻〕

開聞岳の東にある長崎鼻は薩摩半島の最南端になる。岬には古くから浦島太郎伝説が伝わっており、浦島太郎はこの岬から竜宮へ旅立ったという。岬の入口に龍宮神社が建っているが、旅立った浦島太郎ではなく豊玉姫（乙姫様）を祀っている。周辺一帯の浜はウミガメの産卵地であり、「竜宮は琉球城なり」という古書もあることから、浦島の話が現実味を帯びてくる。

〔知覧の豊玉姫神社〕

開聞町から丘陵にある茶畑の中を通り三〇キロ北に進むと、薩摩半島南部の山間に入る。南九州市知覧町の小高い丘を背にして豊玉姫神社が鎮座している。主祭神は、もちろん豊玉姫命（トヨタマヒメ）である。それと共に夫である彦火火出見命（ヒコホホデミ）、父の豊玉彦命（トヨタマヒコ、海神・綿津見神）、妹の玉依姫命（タマヨリヒメ）を祀っている。

「豊玉彦命には二人の娘がいたので、姉の豊玉姫には川辺を、妹の玉依姫には知覧を治めよと言われた。それで二人は衣の郡（今の頴娃（えい）、開聞の辺り）を出発して、途中、鬢水峠、御化粧水、飯野、宮入松、白水を経て取違まで来て泊った。ここで玉依姫は川辺が水田に富むことを聞いて、急いで玄米のまま炊いた朝食をとって川辺へ向かった。それで、何時ものように白米を炊いて食事をした豊玉姫は川辺には入れず、やむなく玉依姫の治めるはずであった知覧へ行って、城山の麓に住んでこの地を豊かにした。それで知覧の民は豊玉姫を慕って、この豊玉姫神社を創建した」と伝えている。

姉妹神のいい伝えは各地にある。コノハナサクヤヒメとイワナガヒメの話もそうであるし、富山県でも姉倉姫と布倉姫は姉妹だったと伝わる。これから向かう薩摩川内（せんだい）の新田神社（にった）に関しても姉妹神の話があるし、宗像三神（むなかた）も姉妹である。とくに九州をはじめとして西日本各地に女神の姿が濃く残るようにみえる。卑弥呼、日御子、日巫女、オオヒル

メなどもこれに関連すると思われる。

古事記の国生みでは、九州島は身一つにして面四つあると言い、筑紫の国は白日別、豊の国を豊日別、肥の国を建日向日豊久士比泥別、熊曾の国を建日別と記している。九州は「日」の土地だったのか。

南九州神話の旅（6）

〔加世田の竹屋神社〕

知覧から一五キロほど万之瀬川を下ると、薩摩半島西海岸近くの開けた土地、加世田に出る。ここ及び野間半島は古代の薩摩国阿多郡に属し、そのまた昔には大隅隼人と並ぶ阿多隼人の勢力圏であった。記紀によると後述の火照命が阿多君の祖であるという。

皇祖ニニギは天降りした後、よいクニを求め荒れ地を通して吾田の長田の笠沙岬（かささのみさき）着いた。この辺りがその土地で、伝承地として有名な野間岬が西方に伸びている。ニニギは加世田に宮居を建て、この宮原の地で妻の木花咲耶姫（このはなさくやひめ）は、三皇子の火照命（ホデリ、海幸彦）、火須勢理命（ホスセリ、火遠理命（ホオリ、山幸彦）を産み育てたと伝わる。長男は火が燃え始めた時、次男は火が燃え盛るとき、三男は火が鎮まるときに生まれた。その後、ニニギらは北方の川内（せんだい、薩摩川内市）に移り、高城千台（高殿）の宮を造り住んだ。お隠れになった後は可愛山陵（えの）に埋葬されたという。

竹屋神社（たかや）は、この三皇子とホオリの妻である豊玉姫命を祀っている。三皇子が火に関することから、焼酎の神も祭られているが、これは二〇一八年以降の事であり、これも祭神発祥の由来を知る参考になる。要はいかなる神も何らかの人々が何らかの理由によって歴史上のある時点で崇め祭ったのである。そして時の流れの中で、神々が合祀されたり分霊されたり或いは何らかの事情で改名されたりしたこともあった。この竹屋神社は明治五年（1872）に鷹屋大明神から改名された。

社殿の背後に両腕を広げた位の大きな岩が、四つほどの岩を土台として据え置かれている。周辺にも岩が点在していて、環状列石（ストーンサークル）で、中央の大岩は支石墓（ドルメン）の天

井石ではないかと推測されている。この磐境（いわさか）は彦火火出見命（ヒコホホデミ、火遠理命）の御陵とも言われている。

〔野間半島〕

以前から、笠沙の岬は野間半島であると聞いていたので、ここには大いに興味を抱いていた。半島長さは一〇キロ足らずであるが、その先に三キロの細長い岬が大海へと伸びている。半島の奥には野間岳（のまだけ、591m）という形の良い山が座していて、海原を進む船にとって重要な目印になっていた。後々の時代になるが、大陸からの交易船はこの山を目指してきたという。野間岳の西に野間池という港があり、ここが岬の根元に当たる。海岸近くには立神（42m）という堂々たる岩が荒波を受けている。野間岬や半島の南側は険しい海岸線が続いていて、立ち岩も多くみられる。

野間岳の南、山腹の八合目に野間神社（のま、南さつま市笠沙町片浦）があり、瓊瓊杵尊（ニニギ）と鹿葦津姫命（かあしつひめ、木花開耶媛）と三皇子を祀っている。ニニギの笠狭宮とも伝えられ、支石墓や積石塚が残る宮ノ山遺跡でもある。また、東シナ海の波が打ち寄せる黒瀬浜はニニギが上陸した地点とされている。

さっそく地元の図書館で地域の歴史を調べてみた。意外なことに野間半島一帯やその周辺には、古来「笠沙」という地名は出てこないのである。では「笠沙町（かささちょう）」はどうかかというと、明治二二年（1889）の町村制施行に際し、大浦村・赤生木村・片浦村から西加世田村が成立し、大正一一年（1922）に笠砂村と改称したのが、昭和15年（1940）に笠沙町になったというのである。これも明治維新以降、日清・日露の戦いに勝利して神国日本の考えが高揚してきた過程で生じたものなのか。

野間半島にある坊津（ぼうのつ）は、古代から江戸期までの長い間、交易船や遣使船で、時には倭寇や密貿易で栄えた港である。それゆえ渡来伝承や海神崇拜など神話につながる物語があっても不思議ではない。それに南九州は北部九州とともに早くから稲作が始まったという事が最近明らかになってきている。

〔薩摩国の中心地〕

南さつま市の市役所がある加世田から、薩摩半島の西岸を四〇キロ北に行くと、川内川（せんだい）の河口にある薩摩川内市に至る。川内川の源

流は霧島山の北に広がるえびの盆地領域であり、その東側の峠を越えると大淀川が宮崎市に流れ下っている。薩摩半島の平野部は地図で示されているよりも狭い。というのは平野部の半分は低い丘陵であるからだ。それらのほとんどは恐らくシラスという火山灰台地であろう。ここ川内市も丘陵が入り組んでいる。古代、この地は薩摩国の中心として国府や国分寺が置かれていた。薩摩国は七〇二年ころに日向国から分離して成立した。七六四年に大伴家持（やかもち）が薩摩守になっている。

ニニギノミコトは笠沙岬から当地に移り、それから住む所を転々と変えている。市内にはその宮跡が五ヶ所ほどある。ニニギの墓は川内川右岸の小丘（神亀山しんきさん）に建つ新田神社（につた）の裏にあり、可愛山稜（えの）と称されている。

〔球磨川と人吉盆地〕

熊本県南部に日本三大急流の一つ、球磨川が流れている。この地域を記紀に書かれた熊曾（くまそ、熊襲）が居いた場所と推定する説がある。また、筑前国風土記では球磨噲噲（くまそお）と表記されているので、熊と曾の二つの種族に分けて、曾（襲）は大隅国曾於郡（そおぐん、霧島市周辺）辺りにいたとか、大隅半島北部の曾於郡（噲噲郡、曾於市周辺）とか、諸説ある。熊曾と隼人の関係についてもよくわかっていない。東北の蝦夷（えみし）と北海道のアイヌの関係もはっきりしていないのと似ているのだろう。こうなると、熊本の熊や阿蘇の蘇も熊曾と関係があるのかと思ってしまう。「くま」というのは薄暗さや影を思わせる語だ。山の中や谷間、あるいは大きな山地の西側を指すようにも思える。そういう所、たとえば古代九州の山間部に住んだ人々（縄文系？）の総称ではなかろうか。

隼人の方は、大隅隼人と阿多隼人（後に薩摩隼人という）の二つの集団が知られていた。五世紀ころからヤマト朝廷に仕え始める者が現れたようだが、八世紀の初めに最後の大規模な反乱を起こしている。隼人の呼称は奈良時代が終わる八世紀末まで使われていた。

余談だが、常願寺川は日本三大急流（富士川、球磨川、最上川）を越える別格激流であるし、称名滝や劔大滝は日本三大名瀑（華厳の滝・那智の滝・袋田の滝）以上の別格大瀑布である。

〔阿蘇山〕

薩摩川内市で神話の旅が終わったと思ったが、そうではなかった。

阿蘇山（1592m）は世界最大のカルデラをもつと記憶していたが、現在は日本第二位（一位は北海道の屈斜路湖含むカルデラ）。阿蘇の周囲を取り巻く外輪山は西が開いていて白川が流れ出ている。中央火口丘群は東方向に連なり外輪山に接している。この火口丘を囲むように湧き水が豊富な平坦地が「C」の字形に広がっていて、四万五千人が住んでいる。

肥後国には四社の式内社があるが、その内の三社がカルデラ内北側の阿蘇市にある。もう一社は装飾古墳が多く分布する熊本県北西部の玉名市にある。

肥後一の宮である阿蘇神社は式内社二社から成っている。一の神殿には、神武の孫でこの地を開いた健甕龍命（たけいわたつ、阿蘇都彦命）、その妻の父である國龍神（くにたつのかみ、神武の子）、子や孫など合わせて五柱の男神を祀る。二の神殿には、妻の阿蘇都比咩命（あそつひめ）、その母、孫など五柱の女神を祀る。

近くの外輪山の麓にはもうひとつの式内社である国造神社（こくぞう、クニノミヤツコ）が鎮座しており、主祭神は、阿蘇国造になった速瓶玉命（はやみかたま）で、父神、妻神、子神を祀る。近くに六世紀後半の小さな円墳が二つあって、国造夫妻の墓として伝わっている。

南九州神話の旅（7）

〔中通古墳群〕

阿蘇神社の北方向の外輪山の麓には、国造神社の他に前方後円墳二基と円墳八基からなる中通古墳群（なかどおり）があり、この辺りが阿蘇君といわれる一大勢力があったことをうかがわせる。長目塚古墳（前方後円墳）は墳丘長が一一メートルあり、地方の古墳としては大きい。参考に、富山県で最も大きいのは長さ一〇七メートルの柳田布尾山古墳（前方後方墳、氷見市）である。

阿蘇山は二七万年前から九万年前にかけて四回の巨大噴火を起こしたという。その後も現在まで小規模な噴火が続いていることから、外輪山の内側に古代から多くの人が住んでいたということは、恵まれた土地なのであろう。外輪山内側の平坦地は標高 500m で、外輪山自体は 800m～1000m

というから、噴火が起きると逃げようがないように思うが、それでもずっと火山と暮らしてきた人々には神威性を感じる。

〔産山村〕

阿蘇神社から東に走ると外輪山への急な登りになり、その先は台地が続く。この道は、大分県の九重連山を通り大野川を下って大分市に通じる。おそらく古代から重要な道筋であったろう。台地から谷に下ると、産山（うぶやま）という小さな村があった。何か由来がありそうだなと、村はずれの神社に立ち寄ると、平川阿蘇神社といって健甕龍命（たけいわたつ）と妻の比咩神（ひめがみ）を祀っていて、神社由緒には「阿蘇大神の御嫡孫が御降誕の際に産湯を沸かした平竈（ひらかまど）を祀り、平竈明神と称えた」と説明されていた。社殿の前には、太い幹にこれまた大きな瘤が隆起した大杉が立っていた。その瘤が神の顔に見えるようで、神面杉と呼ばれている。阿蘇の山の中で、神話伝承に加えてこんな奇怪なものにも出会った。

〔旅を終えて〕

神話の里を探して、南九州の宮崎、鹿児島、熊本を気の向くままに訪ね歩いた。神話が色濃く残っているのは、日向の宮崎県、それに次いで大隅・薩摩の鹿児島県、伝承にほとんど出会わなかったのは熊本県であった。それらをひとつに纏めてみたが、あちこちに似た伝承が散らばっていた。紙面の都合で神代の神々の名の羅列になってしまったような気がする。

そういえば、邪馬台国をはじめ浦島、桃太郎、羽衣などの伝承もあちこちにあるし、平氏の安德幼帝、源氏の義経、豊臣の秀頼などの逃避伝承地もある。富山では、平氏転覆を企てて捕まった俊寛僧都が南の鬼界ヶ島ではなく小矢部の宮島に流されていたと言うし、東部の県境には山姥や金太郎（坂田金時）伝説がある。上市にも、平安時代に活躍した源頼光（みなもとのらいこう）に従って大江山の酒天童子を退治した藤原（平井）保昌、県内には他に渡辺綱、碓井貞光などの子孫伝承がある。

神話については、記紀が編纂された当時であっても、現実とは別の歴史遥か以前の事とされていて、神武記以後とは一線を画し「神代」と題されている。それを現実の世界で見てもよいなどとは、そもそもおかしい事であったのだが、それがまた旅を楽しくさせた。その気持ちは、縄文の村を再現した青森の三内丸山遺跡、弥生の集落である吉

野ヶ里遺跡、あるいは現代の様々なテーマパークに行くのに似ていた。

なぜ、宮崎の地が、日本神話の舞台になったのかという疑問は今でも解けていない。行ってみて思ったのは、宮崎県を含む南海道の地域はとても温暖だという事だ。列島の各地は山が多く森林も多くやや陰湿とした印象があるが、それに比べると、南海道は大海に開けた明るい地方である。それは、豊の国であり、肥(日)の国であり、日向(ひむか)の国であることを実感させた。南からやってきた海洋民族の心境が列島各地に広がった人々に滲みこんでいるからであろうか、南の明るく暖かい土地へのあこがれだろうか、そういう思いが飛鳥から奈良にかけての記紀編纂者たちにもあったのだろうか。

飛鳥・奈良の都を中心にして日本列島の地図を見ると、中国、近畿、東海、南関東は、北緯 34～36 度の圏内にある。その上方 38 度までに北陸、北関東がある。それから北は 46 度近くの稚内まで一気に緯度が上がる。南の方は四国や九州の宮崎市までが 34～32 度圏内であり、宮崎市や鹿児島以南は 24 度の石垣島まで急に緯度が下がり暖くなる。九州島自体が縦長である。人もサル仲間なので暖かい地方を好むのは同じである。

ところで現代でも「神さま神さま」とお願いをするが、いったいつ頃から人の心の中に神様が現れてきたのだろうか。人々が自然界の中で動物のように日々を暮らしていた時は神的なものは感じていなかったと思う。木の実や草、動物や魚介類、すべて当たり前そこにそこかしこにあり、何の疑問もなく日々暮らしていたのだろう。それは自然界の中に溶け込んでいる姿であった。それが変わってくるのは、人が何かを作り始めてからだと思う。最初は石や木から必要な道具を作った時から、次は土器を作った頃から、であろう。人為的な物を作るという事は、自分や自分の周囲の万物も誰かによって作られたという連想を引き出した。そして縄文中期から後期にかけて食料になる植物を栽培するようになると、その思いが強くなる。そこでは、作り出す神から人々に恵みを与えてくれる神の姿を見出したであろう。その神を喜ばしてお願いする事によって豊作を受けようという思いが出てきた。何か姿形の分からない神の擬人化から、神は怒らすと怖いもので、丁重にもてなして喜ばすという事があると考えようになったので

あろう。さらに稲作をするようになってからは、気候の変動や災害などの予測できない事態が食糧生産に決定的な結果をもたらし、それが自分たちの生存を左右することになったので、何か大きな力(すなわち神)に依存しないでは居られない生活になった。その後、国が大きくなってオウという存在が現れてきて、日々の出来事の多くがオウの意向や決定によって大きく左右されてくると、神とともにオウも崇めるようになった。その中から出てきた発想が、神の子孫としてのオウである。確かに、周りの有力者をまとめて国々をも一つにまとめていくオウの威光には人を超えたものが感じられたはずだ。それに優れた者の血縁一族には優れた者が多いという経験から、神的であるオウの位が兄弟、子、孫に継承される慣習ができてきたと思う。古代のオウのイメージは湧きにくいですが、戦国時代の信長、秀吉、家康、戦国の名だたる武将から想像できる。

肥国(肥前・肥後)を阿蘇や雲仙の噴火から「火」の国だと思っていたが、九州島自体が「日」の国とされていた歴史があったのだろう。火も日も「ひ」と発音する。元は明るいという意味ではなかろうか。明るい日中は昼というし、ご丁寧にお昼ともいう。それは「日巫女」「日見子」「日御子」(ひみこ)信仰の地域だったからではなかろうか。これらの太陽信仰は農耕とともに伝わってきたのであろう。

初期の稲作遺跡の分布を見ると、北部九州と並んで南部九州での分布が目立つ。しかし南部九州では青銅器文化が波及しなかった。かといって北部九州に支配されたわけでもない。地下式横穴墓や板石積石室墓という独自の墓制をもっている。記紀には景行天皇やヤマトタケルがクマソタケル(熊襲建、川上梟帥)を征伐したという話があるが、確たる証拠はなく、確かなのは、奈良時代の初頭の七二〇年ころになって隼人がヤマト朝廷に服属したことである。しかも隼人は武勇に優れていたもので、都の護衛の役にも就いていた。

南九州を旅して遺跡や博物館でいろいろ見聞をしてくると、遅れていたのではなく、独自の文化や生活や信条信念をもっていて、独立性が高かったと思った。おそらく大陸南部との直接交易や渡来民による影響であろう。ただ、東シナ海の距離から考えると数は少なかったと思うが、それでも文化として十分に根付いたと考えられる。

6. おわりに

今年は、とにもかくにも 10 周年を迎えての会報をつくりました。記録を纏めてみると、内容の濃い話で大いに盛り上がったことがみて取れるかと存じます。参加されました皆様のおかげと、ここに感謝申し上げます。

今後とも、この語りの場を続けていきます。皆様、よろしくお願いいたします。

これをもちまして、おわりにとします。